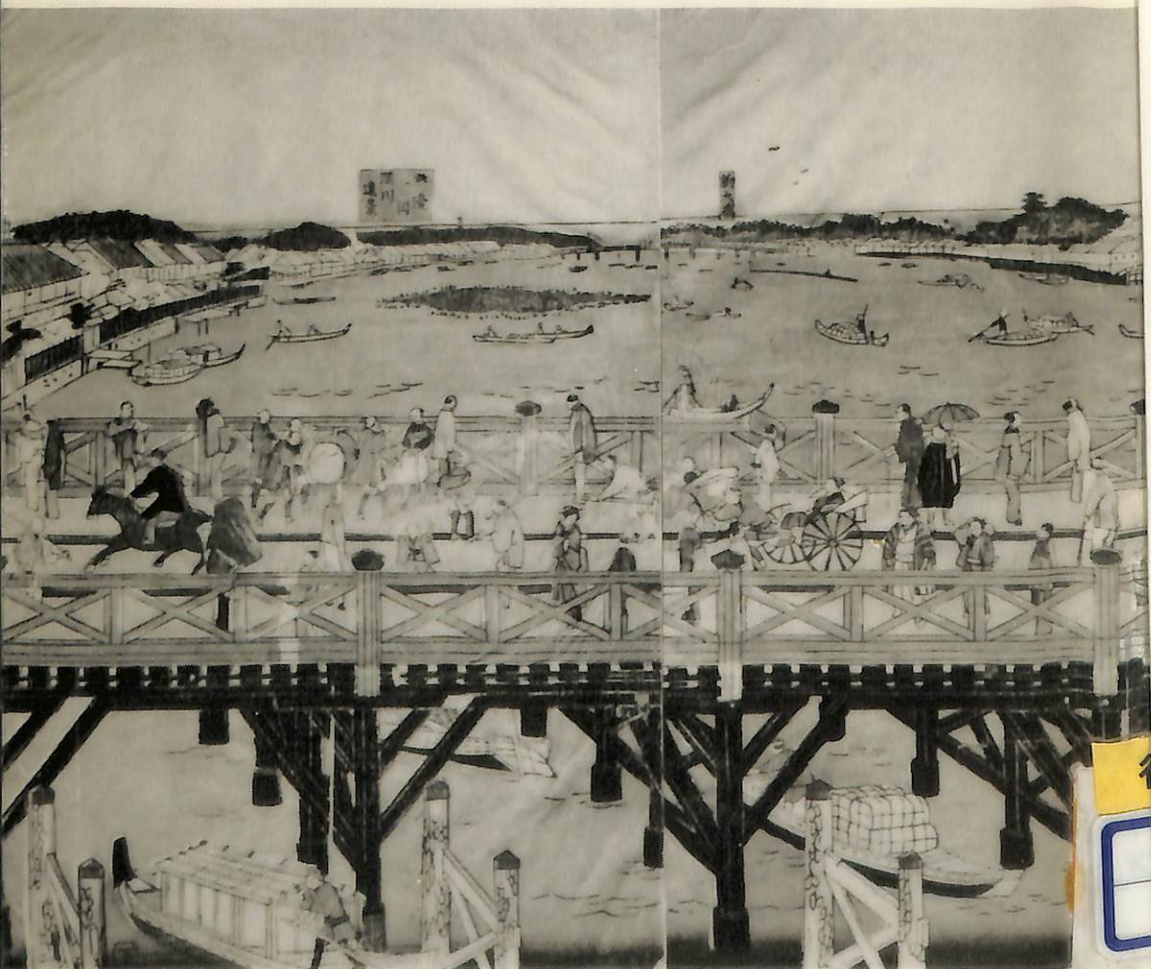
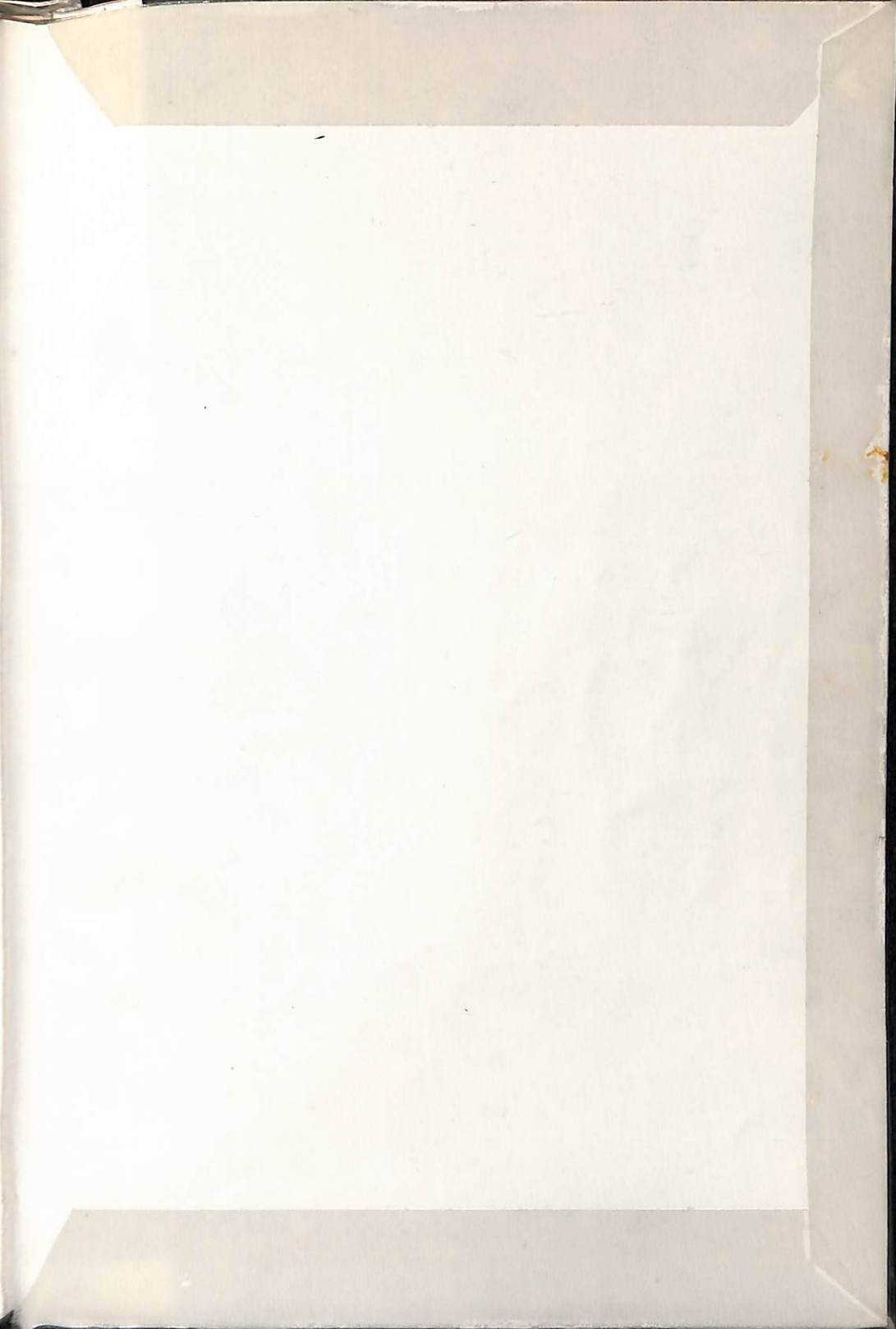
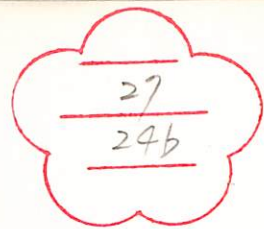


すみだ

ゆかりの人々







東京都立青箱図書館

は じ め に

墨田区は、長年の歴史の中で数えきれない程多くの人々とかわりを持ち、生き続けています。そのほんの一部分の人々を、「社会教育だより すみだ」に第28号（56年4月号）から第47号（60年1月号）まで『墨田区ゆかりの文化人』として紹介してきました。このたび、若干の加筆・訂正をして小冊子にまとめることができました。

執筆していただいた水谷氏をはじめ、写真や資料を提供していただいた多くの方々の御協力を感謝申しあげます。

昭和六十年三月

墨田区教育委員会

目

次

成島柳北	1	松尾芭蕉	26
大田南畝	3	小林清親	28
山東京伝	6	葛飾北齋	31
河竹默阿弥	8	狩野元信	33
鶴屋南北	11	加藤千蔭	36
三遊亭円朝	13	橘守部	38
立川焉馬	16	榎本武揚	41
小林一茶	18	江川太郎左衛門	43
宝井其角	21	安積艮齋	46
服部嵐雪	23	歌澤笹丸	48

(表紙は「東京名所繁栄之内 両国橋図」)

司	馬	山	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬

馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬
馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬	馬

馬

成島 柳 北

明治維新の時、勝海舟の江戸開城論にはあきたらず、
といつて彰義隊の上野の戦争も成算なしと見て加わら
ず、野に下つて向島の秋葉神社近くに居を構えて、悠
々自適の生活に入つたのが柳北成島保民です。

柳北は、翌年には浅草森田町に居を移し、明治三年
夏には日本橋箱崎町の旧古河藩主土井氏の邸内に移転
し、翌年八月には、浅草本願寺々中の敬覚寺境内に転
居しています。なぜ短期間にこのように居を移したか
はよくわかりませんが、本願寺内に移つたのは、彼が
東本願寺法主大谷光瑩の知遇を得たからです。ここで
は学舎を開いて漢・洋の学を教授したということです。

柳北は、天保八年（一八三七）に江戸浅草に生まれ
ました。諱を弘、字を保民といいます。家が柳原の北
にあつたので柳北と号しました（註・柳原の地名は今
ありませんが、神田川に沿つた万世橋から和泉橋まで
の兩岸あたりでしょうか）。

幼い頃から賢く、学問好きで、詩や文章もすぐれた
ものを書きました。勿論、家職が代々幕府に仕える儒

者であつたこともあって、十八歳の時、家職をついで
將軍家定、家茂二代の侍講（註・將軍に学問を教える
職）となりました。しかし、当時の幕吏を批判したこ
とから、一時職を免ぜられました。

文久二年（一八六二）から元治元年（一八六四）に
かけて、当時の洋学者柳河春之・福沢諭吉等と交遊を
重ねて、欧米の事情や學術を学ぶことに努めました。
その頃、幕府が兵制を改革し、彼の手腕に期待して騎
兵奉行に起用し、二百石を給しました。彼は学者とし
てすぐれていたばかりでなく、こうした機略にも富ん
でいたのです。それだけに自説に固執するところがあ
り、さらに新しい兵制改革を主張しましたが、いれら
れずとみるや、あっさり辞職してしまいました。

ところが苦境にあえぐ幕府が、彼のような人材をい
つまでも野におくはずがなく、慶応二年（一八六六）
外国奉行に拔擢し、さらに会計副總裁を兼ねることに
なりました。難問山積の幕政を支える一方の大きな柱
です。しかし、間もなく幕府は瓦解し、その手腕を十
分に發揮するにはあまりに短い期間でした。

明治新政府も勿論、彼の手腕、才能を高く評価して
出仕するよう強く求めましたが、彼は固辞して受けず

幕臣としての節を守りました。

明治五年九月、東本願寺法主光瑩の外遊に従ってヨーロッパを周遊して、翌年七月帰朝しました。彼の明哲な頭脳と旺盛な知識欲とは、最新のヨーロッパ文化を十分吸収してきました。

明治七年九月、『公文通誌』が『朝野新聞』と題して紙勢を拡張するにあたり、乞われて入社。「以てわが熱腸を吐くべし」という大変な熱意と抱負とをもって社長となり、雑録欄を担当して、鋭く時事を風刺して大いに読者を喜ばせました。



柳北碑（長命寺）

さらに明治八年に政府が言論抑圧のために新聞条例と讒謗律を制定しようとするのに対して、猛反対して罰せられました。しかし、これが逆に作用して新聞社はいっそう隆盛になりましたが紅灯緑酒の遊びを好む柳北の放漫経営と記事取扱いの失敗等で社運は衰えていきます。

その後、大隈重信と意気投合して改進黨に入党し、政界に新しく活路を求めましたが、不幸にも病気のため志を果たさずに明治十七年十一月、海櫟園（現言問小学校敷地のあたりにあった隠宅）で四十八年の生涯を閉じました。横川一丁目の本法寺に葬られましたが、明治四十二年に豊島区の雑司ヶ谷墓地に改葬されました。

柳北の多くの業績の中で、「共済五百名社」というわが国保険業の草分けとなる事業を起したことを落すことはできません。

さらに、その多くの著作の中でも、『柳橋新誌』をあげなければなりません。明治初期から中期までの青年に大いに愛読されました。この作品は、柳橋花柳界を中心に描いた戯作的文学作品ですが、永井荷風の新誌評の一部を御紹介しましょう。

大田 南 畝

「柳橋新誌は、今日の文芸鑑賞の眼を以てすれば、柳北が風俗の叙述に託して、青春の歡樂を唱ったものと見て差^{さし}問^{もん}はない。然りとすれば、幕府滅びて後執筆せられた其の第二編に至っては、柳北が時勢に対する失意と中年の悲哀とを述べた感慨の文字と謂ふべきである。…略…」

なお、『柳橋新誌』第一編は安政六年で、後の二編は明治二年の執筆となっています。

最後に彼の短歌二首。

目に馴し景色ながらもゆき返り

みめぐり堤 花に暮しつ

月花を愛でてすみ田の庵なれど

雪の旦^{あした}に しく物ぞなき

大田南畝といつても御存知ない方もあるかも知れませんが、蜀山人と言^いえ^ば、ああ、あの狂歌の上手な人ですね、とうなずく方が多いと思います。それほど狂歌師として有名なのですが、実は狂歌はあくまで余技にすぎなかったのです。これについて『玉林晴朗』の次の一文を御紹介すれば、なるほどと御理解いただけると思います。

「江戸時代において最も其の名声の天下に響いた大文豪であつて、其の学問と云ひ、人柄と云ひ、殊に江戸の人達の間には深い尊敬をもって迎えられ、生前に於ける蜀山人の人気と云ふものは、素晴しいものであったが、又、没後に於ける追慕者の数も多く、今日猶『蜀山人』の名は多くの人に知られ、翁を敬愛する人々が尠^{すくな}くない。翁の一般的に最も良く知られた号は蜀山人であるが、実はこの号は、晩年即ち享和以後に至つて狂歌に用ひられた号なのである。その以前において、即ち狂歌の全盛を極めた天明時代に至つては、『四方赤良』と号しており、其の頃は四方の名が天下に響

き渡って居たのである。然しながら蜀山人の本領は学者であり、又詩文に在るのであって、学者・詩人として若い時から晩年まで終始通して使用していた号は、『南畝』であつた。…略…

さて、南畝は寛延二年（一七四九）三月三日、牛込御徒町（現新宿区）に父正智、母利世の長男として生まれました。本名は覃、通称は直次郎で、父は御徒士という役目をもつ貧しい幕医です。しかし、教育熱心な父は、彼に十分な学問をしこんで、その道で世に立つことを期待しました。

十五歳の時、内山賀邸に入門しました。賀邸は勝れた儒者でありましたが、歌人としても知られ、江戸六歌仙の一人に数えられるほどでした。さらに南畝は、荻生徂来派の松崎観海という当時知名の大儒にも師事しました。そして、十七歳で父の職を継ぎ、徒士となりました。若くして父の後を継ぎながら、彼は期待にたがわず十八歳で作詩用語辞典『明詩權材』五巻を刊行して、その才能のひらめきを見せました。

こうした秀才の彼にも、身分制度の壁は厚く、学問で身を立てるといふ願ひは達せられませんでした。その欲求不満から狂詩集『寝惚先生文集』の自嘲となり

外に向かつては武士階級の窮乏を嘲笑し、賄賂と情実で動く要路幕臣への批判という論調をとらせたといえます。例えば、この狂詩集の一例を読んでもそれがわかります。

「貧スレバ鈍^{ドン}スル世ヲイカンセン食フヤ食ハズノ吾ガ口過^{クチスギ}

君聞カズヤ地獄ノ沙汰モ金次第持グニ追付ク貧乏多シ」

こうした庶民的感觉は、当時の一般町人に大いに受け入れられ、狂歌などの趣味を同じくする町人とのへだてのない交際を楽しみ、遊里等にも大いに遊び、自



南畝詩碑（牛嶋神社）

由な生活を楽しみました。

天明三年（一七八三）には狂歌集『万載狂歌集』を刊行して、ますます狂歌熱をあり、さらにその天分と時流にのって、洒落本・黄表紙・喃本等にもその才筆を揮い、江戸文学の確立に貢献します。

また、二十五歳の夏、十代將軍家治が隅田川に徒士の遊泳を見た時、彼はその選に入り、賞として時服

（註・季節の衣服）を与えられています。

こうして順調に見えた彼も、三十八歳の時筆禍を蒙り、徒士の職を失い、小普請入りとなります。ここで二十年にわたる文学活動を中止し、幕吏としての勤務と学問に専念します。そして寛政六年（一七九四）二月に湯島聖堂で行われた学問吟味には首席で及第し、銀十枚を与えられます。やがて支配勘定に昇進し、幕臣として大いに才能を発揮しました。

戯作こそやめましたが、随筆や紀行文などには、その後も多くの作品を遺し、狂歌も実力抜群のため絶つことができず、数々の秀作を詠みました。江戸市民にとっては、南畝は有能な幕吏としてより、優れた文人として敬愛されました。そして寛文六年、七十五歳で歿します。

向島の長命寺には、江戸五狂歌師の連歌碑があり、そこに蜀山人の狂歌『どのよう那ん題目を可け累と毛よむ八妙法連歌狂哥師』と刻まれています。また、牛島神社境内の手水屋近くに彼の詩を刻んだ名碑「貞観緑字」の詩碑があります。さらに向島百花園が佐原鞠場によって開かれた時、多くの文人達と共に梅樹を贈り、『花屋敷』と題した篇額を掲げました。最後に狂歌二首。

生きすぎて 七五年喰ひつぶし

かぎり知られぬ天地の恩

遠乗の馬二三疋 すみた川

疲れたりとも花につなぐな

山 東 京 伝

「なにわともあれお膝元、朝は夕なに江戸城の、金のしゃちほこ斜にながめ、おぎあと産れて水道の、水を産湯につかうのも、長じてくらうおがみづき、ぴかぴか光る銀シャリも、他国じゃかなわぬ都ぶり。

都なりやこそきそう粋、五千石より君と寝よ、かかあまげても初鰹、なにがなんでもこの土地は、日本中をひとつとこ、寄せても余るにぎわいの、中でも名高き日本橋、よろずにわたる中心地。…略…」

これは京伝の数多い洒落本の中でも傑作といわれる『通言総籙』の書出しですが、大部分は会話中心で進められていきます。その内容は遊里に取材して、通の意

識によるうがちの態度を深め、遊里の人間のいろいろな型や遊びの表裏を、写実的手法で縦横に描き出し、しかも小説的構成をもつのが洒落本だといわれます。

勿論、京伝は第一人者として多くの作品を出しますが内容が遊里のことだけに、幕府の寛政の改革にふれて寛政三年三月、手鎖五十日という厳罰を受けました。

作者ばかりか版元も財産半分没収という厳しい処分を

受けるなどして、京伝は精神的にも大打撃を受け洒落本執筆を断念します。その後、伝奇的な読本に転向しましたが、この領域では『南総里見八犬伝』等で名声あがる滝沢馬琴には及びませんでした。

さて、京伝は宝暦十二年（二七六一）深川木場に生まれましたが、後に京橋に住みました。父伝左衛門は伊勢の人ですが、真面目な商人として才覚も理財的手腕もありました。一方、なかなかの通人で、粋と洒落とを解するさばけたところがありました。したがって、遊芸・浮世絵・演劇に理解と趣味があり、温和で子に甘い父親でした。母親は御殿奉公をしたので堅い人でしたが、捌けたところもあり、大まかのようにで細かく行届き、情に厚い人でした。

京伝は姓名を岩瀬田蔵のぶたと言い、幼名を甚太郎のちに伝蔵、また名は醒さむら、字を西星と改めました。別号は山東庵とか醒齋等と数多くあります。一般によく知られている京伝という号は、京橋に住む伝蔵を友人がつづめて京伝と呼んだのをそのまま号として使ったとも云われています。

彼は青年時代に長唄、三味線を堺町の松永某に学び絵画を北尾重政に学び、北尾政演と号し、挿絵、錦絵



京伝墓（回向院）

等を描きましたが、色彩豊麗でしっかりした構図を持っていました。法泉寺（東向島三丁目）に歌碑のある窪俊満等とともに重政の弟子中の逸材でした。なお、重政は北齋も尊敬したほどの浮世絵師でした。

また、当時十八大通の一人といわれた浅草蔵前の札差文魚と親交があり、吉原に遊んで、家にあるのは一箇月のうち五、六日に過ぎなかったとさえ言われています。そして二度結婚していますが、妻にしたのはいずれも遊女でした。しかし、こうした生活経験が、その作品の中に存分に生かされたわけです。なにしろ、

十八歳で、黄表紙『開張利益札遊合』^{めくりあい}を発表、さらに二十二歳で発表した『御存知商売動』が蜀山人に認められ、一躍流行作家となりました。

黄表紙とは表紙が黄色の草双紙の体裁をとっていたのでこの名があります。軽妙酒脱を喜ぶ当時の民衆の気持を反映して、トピックス、事件、流行等広く社会生活に取材して、洗練された洒落と趣向の中に悪意のない風刺と毒舌とをきかせ、江戸中流町人や武士に支持された小市民的文学です。もともとが子どもの絵本から発展したものだけに、はじめは絵を主に短い文章がついていたのですが、後には絵と文との比重が五分になり、渾然一体のおもしろさが実現されます。京伝の黄表紙は、その点で自分ですぐれた絵と文章が書けたことが、大きな力となります。なお、京伝は洒落本では、もっぱら遊里が主題でしたが、黄表紙では、『時代世話二挺鼓』^{だいせわにちようこ}のように政治諷刺の筆もとりました。

京伝は、三十三歳の時に京橋に京伝店^{だん}と称する煙草と煙草入れ等売る小間物店を開きました。しかも煙草入れ等には新意匠を案出して大繁昌し、さらに奇応丸等の売薬も営み、理財の才も示しました。作家として原稿料をとった最初の人といわれる京伝ですが、「草

河竹 黙阿弥

双紙の作は世を渡る家業ありて、かたはらになぐさみにすべきものなり」と述べています。彼以後の戯作者もこれにならって、商売をしながら戯作に励んだ者も少なくありません。

京伝は、文化十年に読本を書くことをやめ、以前から興味をもっていた近世風俗の考証的研究に進み、『骨董集』等の著作を遺し、文化十三年、五十六歳で急死し両国回向院に葬られました。三基並ぶ墓碑は、中央が両親、左が京伝、右が弟京山です。

花の咲く

春をば待ちしかいもなく

片枝よりして 枯れし老梅

これは黙阿弥の辞世の歌ですが、彼は本所二葉町（現亀沢二丁目）の自宅で明治二十六年一月、七十八歳で歿しました。死んだ日の午前九時に「『さて今日こそは別るべし、午後までは保つまじ』と告げ、遺言書をのこし、午後四時少しすぎ眠るが如く歿す」と伝えられています。

幼名を芳三郎といい、江戸日本橋通二丁目で湯屋の株の売買を業とする越前屋勘兵衛の長男として、文化十三年（一八一六）に生まれました。

祖父は通人肌で贅沢な江戸子気質、ために家産を傾けてしまったような人。ところが父は反対に、質素で堅固な性質。母は武家の出で、ものやさしい気立の人。こうした人々の気質をそっくり受けついでのが黙阿弥だと説く人もあり、彼の一面を示すこんな逸話があります。

十四歳の春、芸者雛妓にとりまかれ、賑やかに料亭

へ上りこむところを伯父に見られてしまい、父の怒りに触れ、勘当されて伯父に預けられました。十四歳とは、ちと早すぎるようにも思えますが、文化・文政期の江戸町民文化は爛熟、頽廢の極みにあり、遊惰淫佚の風は、こうした若者をすっかり遊蕩児にしてしまいました。

しかし、彼は二十歳の時、五世鶴屋南北（四世の孫・天保八年襲名）の門に入り、勝謔蔵を名乗って市村座に出勤しました。やがて一時劇場を退きましたが、二十七歳、斯波晋輔を名乗り、狂言作者として河原崎座に所属しました。翌年、三世桜田治助の勧めで河竹新七の名をつぎ、立作者となりました。

（註）立作者とは、座付作者の第一人者のこと。劇作家として、自分の才能を十分發揮できる立場になります。

彼の処女作は『昇鯉滝白旗』ですが、天保以来、作者生活五十余年、作品は三百五十余編にも及び、江戸歌舞伎後半期の集大成者として、第一人者の地位にありました。その劇作期は四つにわけられます。

第一期は、小説の脚色と在来作品の補作時代です。

『小幡小平次』『白縫譚』等があります。

第二期は、幕末の名優、市川小団次との提携時代で安政から慶応に至る十年間に多くの新作世話物を書きました。今でもよく上演される『三人吉三』『弁天小僧』『十六夜清心』等の多くの名作で、白浪作者の名をほしいままにしました。

（註）白浪作者とは、盗賊を主人公とする作品をかく人のことです。

第三期は明治維新後で、時代は文明開化で、西欧文明の嵐が吹きまくり、歌舞伎の世界にも新時代の息吹



狂言塚（百花園）

きが強く影響します。こうした時代の要請を鋭くとらえた彼は、九世市川団十郎のために、新時代の史劇として活歴史物やこれに準じた御家狂言物を書きました。

『慶安太平記』『黄門記』等があります。

また、五世菊五郎のために『髪結新三』『河内山』等の世話物、明治の新風俗を写した散切物、『女書生』『人間万事金世中』等も書きました。

(註)。活歴史物というのは、史実に即して書かれた

歌舞伎狂言。

。世話物というのは、その時代の世態・風俗・人情を背景として、その時代の出来事に取材したもの。

。明治になって、人々が頭髪を短く切るようになったのでそれを散切頭といいました。

第四期は、明治十四年に『島衛』を発表して古河黙阿弥と改めて以来晩年に及ぶまでの時期で、『高時』『加賀鳶』等の他、『舟弁慶』『かっぱれ』等の舞踊劇を遺しています。

晩年は、謹言篤実な人格者として河竹一門を統率しその門下から多くの優秀な作者を輩出しました。また養嗣子の河竹繁俊によって、『黙阿弥全集』全二十六巻

と評伝『河竹黙阿弥』が出版されています。この評伝の序文を坪内逍遙は次のように書いています。

「一人にして能く前に往ける幾多同業者の長所特質を踏襲し得たる上に、移りゆく時代の好尚にも自由に響応し、しかもよく見識を持して品位を墜さず、其作いよいよ出でいよいよ老巧に、斯道の宗師と崇められ個人としての人格も卑しからず、次の全く異なる時代までも尚若干の余威を存して、前期の総代表と見做さるるが如き劇作家は、内外ともに其例多からず。而して河竹黙阿弥は、其多からざる総代者の一人なり……略……」

なお、向島百花園にある「忍塚」の碑は、黙阿弥が初世河竹新七の追普のための建てたものであり、「きょうげん塚」は、黙阿弥供養のため、彼の娘と、三世河竹と門人其水によって建てられました。

鶴屋南北

鶴屋南北、正確に言えば四世鶴屋南北は、宝暦五年（一七五五）日本橋新乗物町（中央区本町四丁目あたり）に生まれ、幼名を源蔵、後に伊之助または勝次郎と言いました。父は海老屋伊之郎という紺屋の型付職人でしたから、彼も紺屋の職人となりました。

しかし、生来の芝居好きと文才から紺屋の職人では満足できず、初代桜田治助の門に入り、桜田兵蔵と称し、狂言作者の道に進みました。彼が二十二歳の時でした。宝暦の末から天明（一七八〇頃）にかけては、歌舞伎の最も栄えた時期で、東西伯仲して名優が輩出しました。彼はよい時期にこの道に進んだと言えます。しかし、紺屋の倅で満足な学識もなく、「その旗・渡せ」を「その畑・渡せ」と書き誤まる等は珍らしいことではありませんが、学問を超越した天稟の才の豊かなこと、鋭い観察眼と奔放な作想とで人の意表に出るすばらしい才能に恵まれていました。まさに天性の狂言作者ではありましたが、その才能を認められ、その地位が向上することはなかなか容易ではありませんでした。

彼は二十七歳の時、三世鶴屋南北の娘お吉の婿となります。なお、初世から三世までは俳優で、四世、五世が狂言作者となりました。

さて、彼は四十七歳の秋、ようやく河原崎座の立作者格の場に坐りました。狂言作者が認められるためには実力だけではだめで、地位のある有力な役者の引立を必要としました。南北の場合は、当時名優と言われて世評の高かった元祖、尾上松助がまず現われました。

出世作『天竺徳兵衛韓劇』は、文化元年七月河原崎座初演ですが、松助の水中早替りの至芸と鎖国政策の幕末に、舞台に展開される妖しい異国趣味は、当時の民衆の心をしつかりとらえ、七十余日という記録破りの長期興行となりました。なにしろ徳兵衛は実在の人物で、角倉了以（註・江戸初期の豪商・土木家、京都住）の書記役で、寛永の頃何回かインドへ渡ったことがありますが、それをモデルにしているので、舞台上で語られる珍奇な異国の風物は、大きな魅力であったと思います。なお、徳兵衛は、晩年剃髪して宗心と名乗って大阪に住んだといえます。

さて、南北の作品には、本所や向島あたりがよく出てきます。有名な『東海道四谷怪談』のクライマックス

——「蛇山庵室の場」は本所原庭町（現東駒形二丁目）あたりと考えられます。さらに『桜姫東文章』の第四幕は「三囲の場」として、遠見に今戸橋や待乳山の夜景が出てきます。また『お染久松色読販』では、序幕第一場は「柳島妙見の場」となっています。さらに第三場は「小梅代地の煙草屋の場」となっています。まだまだ他にも多いのですが、南北は墨東の地形や地名等によく通じていたようです。晩年は江東区牡丹町にある黒船稲荷境内に住んでいたといえますから。さて、阿竹繁俊著『黙阿弥と南北』の「はしがき」



鶴屋南北墓（春慶寺）

にこう書かれているのが注目されます。

「南北と黙阿弥とは、近世歌舞伎の二人の大立者である。南北から黙阿弥へという戯曲史上の展開は、同時に江戸歌舞伎が爛熟頹廢の美を極度に發揮した時代にあたる。

黙阿弥は南北から直接指導こそ受けなかったが、師系から南北の弟子であり、実際に崇拜してもいたのだから、二にして一つの流れといってもよい。文化文政度に南北の創成した奔放自在なものを、黙阿弥は守成的にさらに洗練し、詩化し、集成し、しかも明治維新後の新時代への橋渡し役もつとめたのであった……略……三十年近い下積み生活をぬけ出して、ひとたび立作者になると、文政十一年十一月二十七日、七十五歳で歿するまで、彼に肩をならべることのできるような優れた劇作者が現われませんでした。写実と超現実との一体化、早替りと仕掛物の技巧をこらすなど、常に人の意表に出て効果あらしめようと、工夫努力を重ねて数々の名作を遺しました。

南北の墓碑は、業平二丁目の春慶寺にあります。また、劇作家宇野信夫が南北の偉大さを偲んで建てたという供養碑もあり、碑面には「なつかしや本所押上春

慶寺 鶴屋南北おくつきどころ」と刻まれています。

宇野信夫は、著書『歌舞伎役者』の一節にこうも書いています。

「門を入って左手の銀杏いちょうの根かたに、無惨に欠けた墓石が倒れている。住職はそれを指さして、これが南北の墓だという。春慶寺は昔は三千坪もあり、電車通りから停留所前の銀行辺迄墓地だったが、戦前の区劃かく整理のおかげでこんな有様になってしまった。…略…」（註・春慶寺は小規模ながら、鉄筋コンクリートの寺院として復興し、南北の墓碑も整備されました。）

三遊亭 円 朝

円朝は明治九年、三十九歳のとき本所南二葉町（註・現亀沢三丁目とも石原三丁目ともいう）に五百坪の土地を買って家を建て、明治二十年まで住んでいました。円朝といえば、落語等に趣味のない方でも、恐らく御存知ない方は少からうと思われるほど有名な噺家はなしかで、幕末から明治にかけて活躍しました。彼は天保十年（一八三九）江戸湯島切通し（有名な天神社がある所）に出淵長蔵、すみの長男として生まれました。

出淵家の先祖は柳生宗矩やぎゅうむねのりの印可を受け、越前侯に仕えて剣術指南役となった、新陰流出淵派の祖といわれる出淵平兵衛盛次です。しかし、長蔵は堅苦しい武士を嫌って、橋家はしなや円太郎と称して噺家になりました。その血を受けたのか円朝も落語が好きで、七歳で小円太と称して高座の人気を集めました。勿論、母は彼を武士に育てたくて、これには大反対でした。

しかし、十八歳で真打となり、円朝を名乗りました。この若き日の円朝を描いたこんな文章があります。

「三扇の定紋のついた黒羽二重の衣裳に白博多、若

しくはお納戸献上（ねずみがかったあい色の独鈷形の模様をおりだした博多織）の帯、緋縮緬（びぢりめん）の襦袢の袖をちらめかし、若衆俳優の如く薄化粧などしたる艶めかしき容姿にて、まづ婦女子の人氣を得、次第に芝居噺を工夫し、当時の人氣俳優の假声（かいこゝろ）をよくし、話込み、語り来ってパツと後幕を切つて落せば、灯入りの遠見（背景画）などよろしく話中の情景を展開し、それを背景に語り進むという、厭味あれど才氣ほとばしり、かつ話中の人物を百人百様に活躍せしむることに勝れたため、益々人氣をあぐるに至り、創作の才もすぐれ、多くの新作を演じて非凡といわれる。…略…」

このようにして、芝居噺に新しい世界を築きました。円朝は、十三歳の時、歌川国芳の弟子となり、一年余り画業に励んだこともあり、背景画は自分で工夫して書き、余人にはまねのできないすばらしい芝居噺を聞かせました。

しかし、三十四歳の時、思うところがあって芝居噺は、道具類一切と共に弟子円楽にゆずり、三代目円生として素噺（すばなし）だけに精進しました。

前に円朝の創作の才にふれましたが、その作品の多さは眼をみはるばかりで、ここに挙げつくすことはで

きません。中でも墨田区にゆかりの深いものに『塩原多助』があります。彼はこれをものにするために実際に現地を訪ねて、いろいろ取材しています。この話ばかりで小学校の教科書にものったことがあり、また河竹新七の脚色で歌舞伎の舞台にものりました。さらに講談・浪曲にもなって、大いにもてはやされたものです。それにしても、円朝の作品で脚色され、上演されたものは、他にも少なくありません。

また、怪談噺は円朝得意中の得意です。有名な『牡丹灯籠』、『真景累ヶ淵（しんけい累ヶ淵）』等、これまた傑作ぞろいです。



円朝墓（谷中全生庵）

怪談というと岡本綺堂の思い出話がすぐ頭に浮かびます。それは大要こんな話です。

綺堂が十三、四歳の頃『牡丹灯籠』の速記本を近所の人から借りて読んでみましたが、ちっとも怖くありませんでした。半年ほどして、近所の寄席で円朝の『牡丹灯籠』の口演を実際に聞きに行きました。それは、初秋の雨の夜でした。

円朝が高座で話し始めると、だんだん彼は妖気を感じて、首のあたりが冷くなってきました。大勢の聴衆がギッシリと詰まっているのに、自分一人が怪談を聞かされているような怖しさを感じます。十時頃、寄席がはねると、雨の夜道を逃げるように帰ったというのです。彼は、寄席はランプで薄暗く、しかも秋雨の夜とあっては、怪談に恰好の条件ではあるがそれでもなお、円朝の話術の妙ということをつくづく悟ったと語っています。話術の妙と言えばこんな話も。

ある晩のこと、円朝が一席終った時、いつものようにとたんに割れるような拍手が起りませんでした。「おや？」と思って客席を見ると、彼の話に引きこまれて客という客が身を乗り出して満足しきって聞き入っていたのが、元の自然の姿にもどるところでした。やが

て万雷の拍手が感激と感謝の心をこめて場内に鳴り響いたのです。

なお、『牡丹灯籠』の速記本は、明治十七年に落語としては初めて円朝が出したのです。円朝についてはまだまだ書きたりませんが、木母寺（堤通二丁目）に門人と共に「三遊塚」という石碑を初代・二代円生追福のために建てたこと、幕末の傑物、海舟・鉄舟・泥舟の知遇を得たこと、明治三十三年、六十二歳で歿するや鉄舟が創建した谷中の全生庵という寺に葬られたことをつけ加えておきます。

円朝 辞世

耳しいて聞定めたり露の音

立川 焉馬

いそがずば 濡れまじ物と

夕立の

あとよりはるる 堪忍の虹

この狂歌は、向島の牛島神社境内にある焉馬の狂歌碑に刻まれています。文化七年（一八一〇）三月に建碑されたもので、南鳥居をくぐってすぐ右手の石碑群の中にある高さ八〇cmほどの小ぶりの青石の碑なのでちょっと見すごしがちです。

この狂歌の作者焉馬こそが、江戸落語中興の祖といわれる人で、本姓は中村利貞、字は英祝——書には英税とも、俗称は和泉屋和助といい、本所相生町（現緑町一丁目）に住んでいました。なお、立川は豎川のあたりに住んだので、こう名乗ったと思われます。本職は大工棟梁で、他に足袋や木綿類も商っていました。暉峻康隆氏の説によれば、焉馬の家柄は庄内藩の小普請方を勤めた準士分の家柄だったそうです。

狂歌や戯文に長じ、鳥亭焉馬と号して活躍し、洒落本、黄表紙等に多くの作品を遺しました。まさに江戸

戯作界の大家です。落噺等は、むしろ余戯でしたが、時流にのって江戸落語の隆盛をもたらす大きな力となりました。

名優といわれた五世団十郎と親交があり、団十郎をもじって自ら談洲楼と号しました。また、自分が大工であったことから、「鑿鉋言墨曲尺」と大工道具をもじった号をとえたり、桃栗山人柿発齋等とも称しました。

彼は寛保三年に生まれ、文政五年（一八二二）に八十歳の長寿で生涯を閉じ、最勝寺（註・本所区表町、現東駒形二丁目から江戸川区平井一丁目へ大正二年移転）に葬られました。法名は「三楽院寿徳焉馬居士」。

焉馬は、天明三年（一七八三）に柳橋河内屋で開かれた「宝合せの会」で落噺を口演し、なかなか好評でした。宝合せというのは、品物で地口の洒落を見せるので、例えば、えんどう豆を口にはうりこみ、もりそば十枚を指さして、エンドウムシヤモリトオ（遠藤武者盛遠—後の文覚上人）としゃれるようなものです。

天明六年（一七八六）四月には、向島の料亭武蔵屋権之方で、第一回の噺の会を開きました。座敷には毛氈をしき、講席に机、床の間には桃太郎の掛け物に、

きび団子を供えるといったしつらえて、その後の席もこれにならいました。

集まった面々といえ、四方赤良・鹿都部真顔・朱楽管江・大屋裏住・宿屋飯盛・竹杖為輕等の江戸で名の売れた狂歌師たちですが、異色のところでは団十郎も加わりました。要するに同好の士の集まりで、互に落嘶を披露して興じたもの。勿論、入場料などはとりません。したがって話す方も客に媚びるような芸を必要とせず、ほんとうの意味で、洒落や粋の解る人々の集まりといったふん囲気でした。



狂歌碑（牛嶋神社）

この会の後、天明七年は前年の秋に洪水があったので開かれず、第二回は天明八年正月に東両国尾上町の京屋で開かれました。この会にも団十郎が出席して、

「我國のはなしに咲ける梅の花」と一句詠むと、馬はこれを受けて「香を聞きに来る春のもろ人」と詠んでいます。そして、四回目からは正月二十一日に「嘶初めの会」として開かれるようになりました。廿一日をつめると昔となることから、昔ばなしの会という意味でこの日となったようです。こうした会も、幕府の寛政の改革にひっかかって、「宇治拾遺物語披露会」と改名して続けましたが、これもやがて中止させられました。『宇治拾遺物語』は編者不詳です。内容は我が国は勿論、中国や印度等の説話百九十七話を集めたもので、滑稽的要素も、仏教的色彩も濃いといった説話集です。

こうして禁止されたり、復活したりを繰り返しましたが、落嘶は江戸市民の中に確実に根を下していきました。例えば、もとは櫛屋^{くしや}だった三笑亭可楽が、寛政十年（一七九八）十日、はじめて下谷の寄席に出て落語をやり、この時は失敗でしたが、以後、職業落語家としての修練をつみ、立派に高座をつとめるようにな

りました。

やがて寛政の末頃から落語が盛んになり、職業落語家が輩出しました。そして、話の形式も、内容も、語り方も豊富になっていきました。今いう古典落語もこの頃ほぼ完成されたようです。焉馬がまいた落語の種は確実に花開いたといえましょう。なお、落語という言葉が一般に使われるようになるのは明治になってからです。それまでは、単に噺とか、落噺とかいっただけです。

小林 一茶

鍛の柄に鶯鳴くや小梅村

木母寺の花を敷寝の蛙かな

とぶなのみそれぞれそこは角田川

十五夜や田を三巡りの神の雨

一茶は墨田の風物を詠じた俳句も数多く遺していますが、なぜか区内には句碑が見あたりません。彼が信濃に歿したからでしょうか。どうも釈然としません。

一茶の故郷は柏原宿（長野県信濃町）で、そこに宝暦十三年（一七六三）五月、農家の長男として生まれました。本名は一、自らは信之といい、通称は弥太郎、庵号は俳諧寺と称しました。三歳で母に死別、祖母に育てられました。やがて父が再婚し、弟が生まれると、継母は辛く当るようになります。それでも祖母が何くれとなくかばってくれたのに、その祖母も十四歳

の時に死んでしまいました。彼は『おらが春』の中でこう述懐しています。

「親のない子はどこでも知れる。瓜を^く啗へて門に立つと、子どもらに唄^{うた}われるも心細く、うらの畑に木萱など積たる片陰に^{かがみ}踞りて長の日を暮しぬ。我が身ながらも哀れなりけり

我と来て遊べや親のない雀

六歳 弥太郎（後略）

十五歳、思いきって江戸に出ましたが、初めの十年間の動静は定かではありません。信濃等からの出稼ぎ人を江戸では「おしな」とか「^{ひく}棕鳥」とか呼んでこき使いました。恐らく一茶とて例外ではなかったでしょう。それにしても、百姓の子で学問のない彼が、どのようにして俳句の世間にはいり、力をつけていったかはよくわかりません。ただ、二十五歳の時には既に葛飾派の二六庵竹阿に師事して、ひとかどの俳人になっていたこと、実に多くの書物を読んで教養を深めていたことはよく知られています。

彼は故郷を出てから二十九年間を江戸に過しましたが、我が家と呼べる住いは、相生町（現緑一丁目）だけで、独り身ながら彼は初めて人間らしい落着いた生

活ができました。ここに文化元年から足掛け五年住んだことでも、彼は事情が許せば永住したかったのではないかと思われます。ところがやむをえぬ用事で故郷へ帰ることになり、留守中の家賃も払い、留守番まで



一茶が晩年を送った土蔵（柏原）
筑摩書房「江戸時代図誌」より

おいて旅に出ました。それなのにこともあろうに留守中に別人に貸されてしまい、帰って来ても住む家がなく、「迹々^{あとあと}の人にあかれな梅の花」の一句をのこして思ひ出の家を去りました。

相生町に住みつくと同じように、彼は再び弟子や後援者の家を転々とする放浪の身となります。こうした彼が心安く世話になれたのは、日本橋久松町の豪商松井家でした。一茶を敬愛し、その俳句をよく理解しました。また、蔵前の札差しで金持ちの、夏目成美にもよく厄介になりました。しかし、成美は社会的にも俳人としても一茶を下に見ていたふしがあります。

一茶は旅もよくしました。上総・下総・常陸方面にでかけ、弟子や後援者の家を泊り歩いています。彼は丹念で手先きが器用だったので、泊まる先々で頼まれれば、時には自発的に障子や張替えもしたようです。とにかく余り恵まれた旅ではなかったようで、日記には「我味の柘榴^{ざくろ}に這^ははす虱^{しゅみ}かな」の句も見えます。なお、関西にも旅を七年ほどしていますが、コースや時期は不明です。

文化十年（一八一三）長年異母弟と争った遺産分配問題もようやく和解がなり、故郷に安住の地をえた時

は五十一歳、翌年二十八歳の菊女と結婚、三男一女を得ました。

五十^{むい} 天窓をかくす 扇かな
這へ笑へ二つになるぞ今日からは

と詠んだ家庭的幸福は、子ども達はみな早世、妻も先立ち、脆くも崩れ去ります。然し暖かい家庭を望む彼は再婚して失敗。三度目に結婚した妻との間にやっとヤタ女が生まれたのは、彼の死後でした。なお、ヤタ女は養子を迎え、一茶の跡を継ぎました。彼女は七十四歳で歿しています。

一茶の死ぬ少し前に柏原の大火で家が焼けてしまい、僅に残った土蔵で、彼が六十五年の生涯を終えたのは、文政十年（一八二七）でした。

一茶の故郷の柏原は、妙高・黒姫等の高峰にかまわれ、美しい野尻湖を控えた秀麗の地です。が、一方では豪雪地帯で冬の生活の困難はひととおりではありません。こうした自然条件と、酷しく薄幸な人生をあゆんだ一茶の句が、芭蕉・其角にない独得な句風で人々を惹きつけることは当然でしょう。

宝井其角

其角と聞けば、区民の皆さんなら恐らく三囲神社にある「雨乞いの句碑」を思い起されると思います。また、歌舞伎や講談の好きな方ならば両国橋での其角とその弟子であり赤穂義士である大高源吾との出会の場面を思い浮べられるでしょう。

遊^{あそ}ふだ地や

田を見めぐりの神ならば

この其角の雨乞いの句は、元禄六年（一六九三）六月のこと、日照りに苦しむ農民たちが、三囲神社の境内で雨乞いの神事を行うところにたまたま来なかった其角が、乞われるままに豊作を念じて「ゆ・た・か」の三字を折りこんで詠んだわけです。百人一首でおなじみの能因法師も、その昔、三島明神に雨乞いの和歌天河なほしろ主にせきくだせ

天くだります 神ならば神

を献じた故事があり、昔は神を心から信じて降雨を祈りました。其角と同じことで、単なる風流ではなく祈りをこめて詠みました。ここで井本農一氏の意見を

御参考までに。

「神がまだ身近に生きていた当時の人々の姿が見られる点、また俳諧が民族の日常生活に融和していた点で、元禄俳諧が現代俳句とは、まだ性格にかなりの相違があったということが示され、またこのことが端的にこの句に現われており、しかもこのような句となると、芭蕉には発見されないという点で芭蕉俳諧との性格の差も現われており……略……」

三囲には其角の句碑として

「山吹も柳の糸のはらみかな」

を刻んだ碑もあります。雨乞の句碑があまりに有名で、ちょっと忘れられたようなかたちになっています。

さて、其角と大高源吾との話ですが、師走の両国橋上で偶然出会った二人、源吾は俳名を子葉といい、其角の弟子です。其角は弟子の余りに尾羽打枯らした姿に「年の瀬や川の流れと人の身は」と問いかけると、打入りを明日に控えた子葉は、すかさず「あした待たるるその宝船」とつけました。句意をはかりかねた其角は、羽織をぬいで寒そうな源吾に贈ったというこの話、史実はともかく味のある話ですね。なお、両国橋の袂にある両国橋児童遊園には、源吾が討入り後に詠

んだという句、「日の恩やたちまちくどく厚氷」を刻んだ句碑が建てられています。

其角は寛文元年（一六六一）江戸堀江町（中央区江戸橋あたりか）に出生。父、竹下は藩医で、俳号は東順。なぜか母方の稷本を名乗り、後に自ら宝井と称しました。幼名は源助とも源蔵ともいい、長じて侃憲と称しました。

延宝のはじめ（一六七五頃か）に芭蕉の門人となり、天和三年（一六八三）に自選俳諧撰集『虚栗』を刊行し、俳壇に地位を確立し、やがて独自の俳風を展開し



「山吹の」の句碑（三囲神社）

ていきます。彼は芭蕉を尊敬し、その作品を深く肯定しながら、蕉風への追隨はしませんでした。しかし、其角の一番の理解者は芭蕉で「師と晋子（其角）と師弟いずれの所を教へ、習ひ得たりといはむ」と問う許六に、「師が風、閑寂を好んで細し。晋子が風、伊達を好んで細し。この細き所師が流なり。ここに符号す」と答えたといえます。とにかく其角の句には難解の句が多く、去来にせよ、許六にせよ、同門の弟子達の多くがもてあまし、その伊達風、その細みを心から理解できませんでした。

江戸の市井に育ち、放縦な生活に花街の味も知りつくしながら、反面、医者というインテリ家庭に成長した体験が、彼を一味違う俳人にしたのでしょうか。彼が権門に出入したことをもって、仲間俳人と批判する人々も多くありましたが、彼には権門におもねる卑屈さはありません。

池田秋晃氏はこう書いています。

「其角は性豪放にして、頗る才気あり、学識また決して浅からず、されば時として豪放の真面目を現わし、時として其の才気を弄し、又時としては其の学識に基づく等、作句の力に於て実に驚くべき手腕を有したり

服部 嵐雪

…中略…然れども其の長所は臆^{やが}て短所となり、奇巧に失し、卑俗に失し、露骨に失するの弊も、其の豪放と才氣とに因るものなしとせず…略…

其角のたくさんの句の中から傾向別にいくつか例句を挙げました。

江戸情緒、遊趣をきかせた句「鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春」「闇の夜は吉原ばかり月夜かな」

素朴な句「牛に乗る嫁御落すな女郎^{おんな}花」。リズムを持つ句「稲妻やきのうは東けふは西」。着想の奇抜さ「うぐいすの曲げたる枝を削りけん」情愛の美しさ、深さ「一鍬に蟬も木の葉も脱^ぬかな」（父の埋葬の句）「夢にくる母をかへすか郭公^{ほととぎす}」

其角は、宝永四年（一七〇七）四十七歳で世を去りました。芝二本榎上行寺に葬られました。

嵐雪は、承応三年（一六五四）江戸湯島（現文京区）に生まれました。俗称は孫之丞、のち彦兵衛とか治介と名乗りました。号は嵐雪の他に嵐亭治介といい、庵号を雪中庵といいました。嵐雪の後継者も雪中庵を称し、十四世まで受けつがれています。なお、画号もあって良香といえます。嵐雪という俳号の由来は、西園寺公経の「花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり」の歌によってつけたといえます。この歌は小倉百人一首の中にありますから御存知の方も少なくないでしょう。

嵐雪は、転々三十余年の武家奉公の後、俳諧一筋に進むようになったのは、主著『其袋』が出版された元禄三年頃（一六九〇）と考えられますが、芭蕉に入門したのはそれより十五年ほど前でした。

嵐雪は其角と共に、芭蕉門下の双壁とたたえられる逸材で、芭蕉から「草庵に桃桜あり、門人に其角嵐雪あり」と調書^{こたがき}（前書き）して、

両の手に 桃と桜や草の餅

の句を贈られたほど高く評価されていました。こんな風でしたから、元禄七年十月芭蕉の死を聞いた嵐雪は同月二十二日には追善の興行を催して、自らは「十月を夢かとはかりさくら哉」の句を手向けました。そして二十五日には義仲寺の芭蕉の墓に詣でて、「此下にかく眠るらん雪仏」と詠じて、雪の義仲寺に師をしのびました。

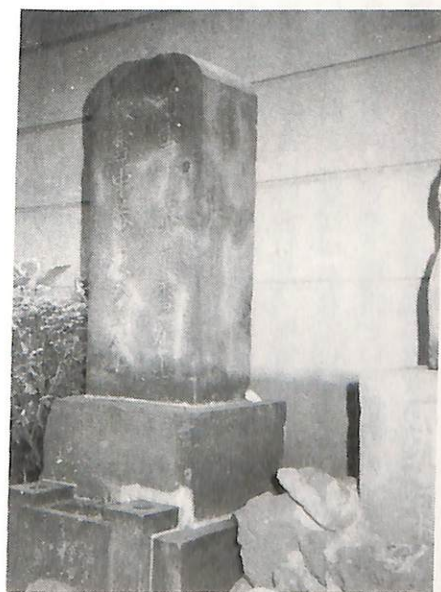
我や来ぬ ひと夜吉原天の川

こうした句もある嵐雪の若い頃は仕官の身分も低く、それだけに束縛の少なかったこともあって、遊里になじむことが多かったようです。其角も吉原によく遊びましたが、彼は遊びも生活と考えました。しかし、嵐雪の遊びは享楽のための享楽ではなく、なじめば湯女も娶るし、遊女でも妻にして生涯の苦楽をわち合うとします。ある湯女とは一子福松をもうけましたが、早産で母子とも死んでしまいました。しかし、天和二年（一六八二）の冬、大火で湯島の住居が類焼した時、門弟のはからいで石町一丁目にささやかな一家を構えました。そして、かねて馴染の遊女を妻に迎えました。烈女といえます。

晩年、嵐雪は黄檗宗の濟雲方丈に禅を学び、元禄八

年正月四十二歳で頭を丸めて「雪中庵不白玄峯居士」と改めました。妻の烈女もかねての念願により尼となり、「雪山浄白」と改めました。

嵐雪は、生真面目さ、素直さが身上で、野心も見栄もなく、素直さから心の余裕を生じ、清浄な平靜心となると彼の人柄を説く人もあれば、銜わず、競わず、おもねらず、成るにまかせて逆らわない、それは自得安心の境外ではなく、生来の物臭さと、消極性と温和な心情が、そんな諦めとも悟りともつかない態度をとらせたと評する人もあります。其角の江戸通人的な伊達



嵐雪墓碑（要津寺）

で風雅、時に晦渋さを、時に銜いや誇張で人を驚かすといった性格とも対比されます。

黄菊白菊

その外の名はなくもがな

『其袋』にのっている嵐雪のこの句ほど「我一生、この句に及ぶと思ひもよらず」と流石の其角を感嘆させた句はないでしょう。のちのち其角に菊の句を請う者があれば、芭蕉の「白きくや目に立てて見る塵もなし」の句と、嵐雪のこの句とを書き、これに其角書としたためてつかわしたと『俳諧世説』に闍更が伝えています。

元日や晴れて雀のものがたり

梅一輪 一輪ほどの暖かさ

この二句とも、嵐雪の句としてよく知られた句ですが、元日の句は、天気がよく晴れたことと、雀の晴ればれとしたさえずりとを合せて、「晴れて」のことばで表わしているところに働きがあります。

梅の句には寒梅のことば書きがありますが、寒い寒いと思ひ暮らすある一日、ぽっと一輪咲きそめた梅花に、嵐雪はほのかな暖かさを感じとっています。

蒲団着て 寝たる姿や東山

この句は、芭蕉の訃報を聞いて義仲寺の墓前にぬかずいた後の吟とか。しみじみとした心で東山を眺める彼の心中を去来するものは何だったのでしょうか。

嵐雪は、珍しく俳論らしいものを遺していませんが、『或時集』の序に珍らしく俳論を述べています。

「花に対して信なくんば花うらみあらん。句は是にならふべし。花に問はば花語る事あり。姿はそれにしたがふべしとある時をしゆ。」

嵐雪は、宝永四年（一七〇七）十月十三日、芭蕉の命日に遅れること一日、「一華散る咄一葉ちる風の上」の辞世をのこして、五十四歳の生涯を閉じました。

松 尾 芭 蕉

区内には、芭蕉の次のような句碑があります。

いざさらば雪見にころぶところまで

(在長命寺)

春もややけしきととのふ月と梅

(在百花園)

こにやくの斜しきも些しう馬の花

(在百花園)

古池や蛙飛びこむ水の音

(在要津寺)

みの虫の音をききにこよ草の庵

(在旧安田庭園)

長命寺は、江戸の頃から雪見の名所として有名で、雪見の句碑を建てるのにこれほどふさわしい所はありません。それにこの寺には、かつて芭蕉堂がありました。また、そこに飾られていた芭蕉の小さい木像は、現在も寺に秘蔵されています。

百花園は、古来文人墨客に愛され梅屋敷とも呼ばれただけに、二つの句碑がピッタリです。

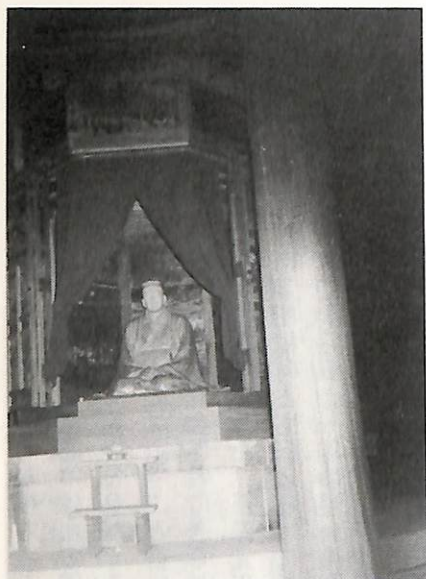
「古池や」の句は、自然を深く見つめる芭蕉が閑寂の境地をとらえた傑作で、晩春の庵の静寂さが眼に浮ぶようです。この句碑に使われている青石もなかなか味のある自然石で、当時江戸一といわれた三井親和の書です。なお、句碑ではありませんが、要津寺には、雪中庵蓼太が建てた「芭蕉翁佛塚」や「芭蕉翁百回忌発句塚碑」もあって、芭蕉と墨田とのゆかりの深さを偲ばせます。

ところで、東駒形三丁目の桃青寺には、芭蕉江戸出府の頃数年滞在したと伝えられています。この寺は、定林院という寺号を芭蕉の法号である桃青にかえ、「芭蕉山桃青寺」と号し、寛保三年（一七四三）には長谷川馬光が芭蕉堂を境内に建て、西行・芭蕉・素堂等の木像を安置しましたが、残念ながら震災等で失われてしまいました。

全国の芭蕉ゆかりの地にある句碑は、何と千五百余とかいいますが、まさに漂泊の詩人にふさわしいと云えましょう。しかし、芭蕉に関する研究書・解説書等も大変な数です。その中から島崎藤村（作家・詩人）の芭蕉観の一節を御紹介しましょう。

「芭蕉は六人ある兄弟の中の次男に生まれた。長兄

との間に姉が一人あり、妹が三人あったといふ。そういう家族の中に成長したことも、少年期から青年期にかけての芭蕉には大切なことであつたろう。幼名金作後に甚七郎、元服しての名を忠右エ門と言つた芭蕉が、伊賀の山の中で送つた少年時代の記憶は、それがいろいろな形となつて、後年の句作の中にはあらはれているのではなからうかと思ふ。芭蕉の句には深い山の中の空気を感ぜさせるものがあるが、わたしはそれを作者の少年時代や青年時代の記憶と引き離しては考えられないような氣もする。…略…」



芭蕉木像（伊賀上野芭蕉堂）

芭蕉は西行に深く傾倒していたといわれ、芭蕉の句を真に理解するには、まず西行を知らなければ不可能とする学者もあります。なるほど、吉野山の奥の奥にある西行庵を芭蕉は尋ねているのです。私も一度行きましたが、よくぞここまで芭蕉がと感嘆したものでした。

さて、芭蕉が俳諧の道にいかに関心する姿にも出ています。師の快癒を願つて多くの弟子達が病床につめかけ、何くれとなく看病に尽すのでしたが、師の病状ははかばかしくなく、日毎に重くなってゆく師を案じながらも、これからの風雅がどうなつてゆくかを師に問いかけました。この時のことを支考の『日記』から引用すると、『『されば此の道の吾にいでて後三十年にして百變百化す。しかれどもそのさかひ、真草行の三を離れず其の三が中にいまだ一、二をつくさざる旨』唇を潤し、潤ししながら漸くに談じ終つた。人々はその真剣さに『やすからぬ道の神なり』と感じあつて、袖を濡らしたという』

十月十一日は朝から全く食せず昏睡状態こんすいで、翌日正午ふと眠ざめたので助け起されて、少しばかり粥に唇をぬらしました。小春日和で障子にはえが群れるので

小林清親

てんでにはえ取りをしました。その取り方に上手下手のあるのを芭蕉はおかしがって、「此のはえの思はぬ病人を宿して喜ぶらめ」といつて笑いました。そして申の刻（午後四時）「死顔うるわしく眠る」と書いているように大往生で、多くの弟子や会葬者に送られて滋賀県大津の義仲寺に静かに眠りました。正保元年（一六四四）三重県上野市（柘植町とも伝える）に松尾与左衛門の子として生れてから五十一年の短い生涯でしたが、俳諧の道には不朽の功績を遺しました。

清親は弘化四年（一八四七）八月一日、本所御蔵屋敷―現在、墨田区役所・新国技館のあるあたり―に生まれました。父茂兵衛は御蔵屋敷総取締、母知加子は浅草御蔵方小揚頭松井安之助の娘です。直参とはいえ身分は低い方でした。七人兄弟の末子で、幼名を勝之助といいました。

幼い頃から玩具を喜ばず、錦絵を与えると喜んだと言います。また、狩野派の画家の所へつれていかれましたが、与えられた手本が実物と違って投げかえしたというエピソードなど、彼の画才というか、性格の一端を示す話があります。

こうした彼も動乱の幕末に成人したので、すんなり画業には進めませんでした。例えば、十六歳の時、父を失い、家をついで武士となっています。二十歳頃、鳥羽伏見の戦に幕臣として参加しています。やがて、幕府崩壊となって生活に困り、剣術興業団に加わったこともあります。絵の好きな彼が、剣術の試合をして見せるといふのは、何とも不似合いな気もしますが、身

長二mに近く、なかなか威圧感を与えたといえます。

二十八歳で母の死にあい、この頃から彼は画業に精を出すようになります。といっても彼はほとんど独学で一家をなしたが、一時的に下田蓮杖について写真術を、英人ワグマンに油絵を、河鍋曉斎・柴田是真等に錦絵を学んだことはあります。

清親は明治九年（三十歳）から十四年の間『光線画』と命名された全く新しい感覚の風景版画を残した絵師として有名になりました。その絵の特質は光と影、光のゆらぎ、色彩の変化を細やかに捉えた点にあります。木版による洋画とでもいうものでしょうか。ヨーロッパの石版画・銅版画にも暗示を得たと考えられます。ちょうど西洋文明移入の初期だけに、なおさら世評を高めたと考えられます。しかも新しい画風の中で、文明開化の波にさらされる東京の中の江戸を偲ぶ抒情を湛えた作品が発表されていたのです。

劇作家木下杢太郎は、清親の絵についてこんなことも書いています。

「彼の版画をば、僕は百枚近く見た。近来珍重せられる静物の類や、また箱根山中の風景の如きは僕は好かない。やはり東京の名所を描いたものが一番好いと



小梅曳舟通雪景（清親・画）

思う。其中で又最も優れたものは『駿河の雪』という題のものである。是は『えちごや』の紺暖簾こんのれんを懸けた店から雪の小路を眺めたところで、恐らく旧の東京下町の殊に濃艶な雪旦ゆきだんの光景がこれほどよく再現せられたるは他にあるまいと思う。…中略…

清親は一体薄明の画家で、雪の絵ならずとも、多くは日の出日の入り、又月光夜雨などの趣を愛している。雪では『池の端弁天』『浅草寺雪中』『雪中両国』などが好く、入日では『三ッ又永代橋遠景』『隅田川枕橋前』など、とりどりにおもしろい。…略…

清親の絵について語る時、明治十四年に始まる錦絵ポンチシリーズ『清親ポンチ』、日露戦争に取材した錦絵漫画『日本万歳百撰百笑』シリーズまで二十数年間風刺性の強い漫画を書き続け、近代漫画の夜明けを上げたことです。

明治後半にはいると、国粋運動の影響もあって洋画をすて、教育漫画や歴史画に多くの作品を残しています。新聞・雑誌・単行本等の挿絵も多くかいています。晩年は、次第に版画から離れ、肉筆画を主とするようになりましたが、大正四年六十九歳で世を去りました。清親によって受けつがれてきた浮世絵の長い歴史も一

応幕を閉じました。彼を最後の浮世絵師と呼ぶ人もあります。

さて、清親の娘可津が、吉田漱著『清親』の序文にこんなことをかいています。その一部です。

「小言も云はず、家庭内の事にも不平も云はず、勿論おこることもありません。一日の中を大方無言で、二階の部屋で絵を書いていた。私は小学校の生活が始まり、ようやく仲間も出来、やっと自分は貧しい絵描きの子だと周囲の事情も察しられるようになる、この一見淋しい我家にもいろいろな人の往来のあることに興味をひかれはじめました。

太平の息子さん。若い達摩さんみたいな巨体に似合はない優しい細い声を出す人。それからそのお母さん。眉のあと青い、ほっそりとした美しい年増でした。—中略—

まるで無口の清親をなぐさめるかのように、わざわざ向島秋葉裏まで三味線箱を抱えて歌うたいを連れて菖蒲浴衣を演奏しに来た明林堂の隠居。…略…

なお、清親は生涯二十一回も転居したといいますが、秋葉神社裏には明治三十三年頃住みました。区内では本所若宮町、相生町にも住んだことがあります。

葛 飾 北 斎

大変大ざっぱな言い方ですが、浮世絵は菱川師宣^{ひしかわもろのぶ}

(房州保田出身)によって一六五〇年頃から世に出ますが、吉原遊里の有様や歌舞伎の舞台を木版画で描いたものでした。木版画ですから多量生産が可能となり、庶民の手にもはいりやすくなりました。画材も価格も庶民のものであることに浮世絵の特質があります。江戸町人文化が独特の華を開いていくとする時に、絵画の面で江戸っ子の心意気を示したものと考えます。

今、ここで浮世絵の歴史をたどる紙数はありませんが、一七六五年になると、版元を兼ねた鈴木春信等の工夫で、多色刷の浮世絵が出来ます。その華麗さから錦絵と呼ばれ、浮世絵の全盛時代を迎えます。

こうした時代、宝暦十年(一七六〇)九月に本所割下水(現亀沢町)に生まれたのが葛飾北斎です。姓は川村、幼名を時太郎、後に鉄藏と改めています。なお、母は小林平八郎(吉良上野介の附人中でも剣の達人といわれた)の孫娘であるというのが彼の自慢であったといえます。

幼い頃、幕府御用鏡師中島伊勢の養子となりましたがこの仕事は継がず、十才頃には彫刻を学んだり、貸本屋の徒弟となつて、本の挿絵等を見て、絵の自習をしました。

十九才、当時役者絵の第一人者と言われた勝川春章の門に入り、翌年には春朗の号を与えられ、専ら役者絵や黄表紙の挿絵をかきました。

やがて、京伝・馬琴等一流戯作者に挿絵画家としての力量を認められるまでになりましたが、師の没後、勝川派を去ります。その理由は兄弟子との不和説、或は破門説等いろいろいわれているようです。とにかくこの頃は貧乏にあえぎ、柱暦^{はしらどき}や七色唐辛子^{しちしきからんし}を売って歩いたとも伝えられます。しかし、この逆境は彼の自負心、向上心を燃えあがらせ、画技の向上に熱中させました。狩野融川・堤等琳・住吉内記等に師事して諸家の法を学び、また洋画にも深い関心を持ち、研究しました。おもしろいことに九世紀フランス印象派を初めとして、ヨーロッパの有名な画家、文人、芸術愛好家たちは、浮世絵の優れた芸術価値を絶讃、北斎等浮世絵の画法が、ヨーロッパ等の画法に大きな影響を与えています。

浮世絵に限ったことではありませんが、ヨーロッパで賞讃されると、すぐ飛びつくのが明治以後の日本に



橋 国 両

よくあることです。浮世絵もその例にもれず、その芸術的価値が再認識され、浮世絵に対する関心が高まりました。しかし、時遅く、多くの優れた浮世絵がすでに海外に流出していました。これに関連して矢代静一説の一部を御紹介しましょう。

「浮世絵師たちは、現在少し持ち上げられすぎている。純粹絵画に比べて浮世絵が劣っているという比較論でいうのではない。どうも浮世絵師たちの生活環境や生活態度が、えらい大芸術家並みに扱われているのが氣にくわない。——中略——

浮世絵は完全に庶民のもので、浮世絵師たちは芸術家ではなく、職人であった。彼等の殆どは裏長屋住いで貧しかった。——略——

さて、北斎は寛政七年（一七九五）四代宗理を襲名しました。初代宗理は江戸中期の町絵師で、上方の宗達や光琳の画風に私淑し、その継承者を任じていました。これは江戸市民の上方文化へのあこがれが、こうしたところにも表われているように思えます。唯、北斎が宗理を襲名した動機はわかりません。なお、この頃、住吉広行から大和絵の手法を学んだとも伝えられ

狩野元信

ています。この頃美人画家としても有名になります。寛政十年（一七九八）北斎辰政と号します。日頃信仰する柳島妙見（法性寺）にちなんでつけたといいますが、生涯に三〇種にも及ぶ雅号と九十三回にもなる転居癖とは、彼の奇人ぶりの一端を示すものでしょう。数多い転居先で、なんといっても本所界限が一番多く選ばれています。

百才迄も生きて、より画風を磨きたいと願った彼も、嘉永二年、九十才で浅草聖天町遍照院地内の仮寓で歿しました。

最後に、彼が谷文晁と共に將軍の前に招かれた時の話。―上野氏の著書から―

「彼は傍若無人の男だ。時の將軍家^{いんぎやう}齊の前へ鶏一羽を持ち出した。大きな唐紙一枚を横に拡げ、その上へ刷毛で藍をさつと一の字ながながに引いた。そして持ち出した鶏をこの唐紙の上へ放ち、シッシツと声で追った。羽衣を着た田舎育ちのハムレットは、役者気取りで紙の上を容体ぶって歩いた。誰一人、この鶏の趾^{あし}に朱肉が付けてあったことを知らなかった。『御覧候へ、鶏の趾跡は立田川の紅葉にて候』と北斎は拝一拝して將軍の前を退いた。―略―」

元信は、文明八年（一四七六）狩野正信の長男として京都に生まれました。通称を四郎次郎と言いました。父正信が四十三才の時の子ですから、どちらかと言えば晩年の子です。生れつき絵が好きで、画法を家庭で学びました。父正信が当代一流の画家ですから、素質的にも環境的にも大変恵まれていたと言えましょう。

十才の時、將軍足利義尚（室町幕府九代）の近侍となり、將軍義澄（十一代）にも仕えました。義澄の死後、各地を遊歴すること数年、大いに画技を磨きました。やがて京に帰って名を大炊助と改めました。そして越前守に任ぜられ、徳大寺町西に宅地を賜わった上、二百石の地を与えられるほど優遇されました。後に剃髪して法眼^{ほうがん}となり、永仙と号しました。（註・法眼とは法印につぐ高い僧位で、中世ではすぐれた画工等に与えられました）。

永禄二年（一五六二）十月六日、元信は、八十四才という当時としてはまれな高令を保って歿し、京都市上京区の妙覚寺に葬られました。

御用絵師となって、英雄が輩出した織豊時代にふさわしい筆力雄大で、新鮮な色彩で一時代を画しました。

さらにその孫探幽は家康に厚遇され、それによって徳川家の御用絵師としての立場が確立され、江戸狩野として活動を始めました。それも鍛冶橋狩野、中橋狩野、木挽町狩野、浜町狩野と分派して、これを奥絵師と称し、これに対し独立、分家した十二家の狩野を表絵師といいました。そのほか、門弟で狩野の名を許された数は大変なものでした。また、諸大名も幕府にならって、狩野派の絵師を召し抱えましたから、狩野派の勢力は全国に及びました。勿論、京都では京狩野として繁栄を続けました。こうした狩野派全盛の基盤を築いたのが、元信であることはいうまでもありません。

したがって、元信の墓碑を江戸に築き、狩野派永遠の隆盛を願ったことは想像にかたくありません。そのために本法寺が選ばれた理由は記録がなくてよくわかりません。唯、本法寺には、木挽町狩野友信が建てた「狩野家墓」と刻まれた墓碑や、山下狩野信之や深川水場狩野知信を合葬した狩野家「先祖累代墓」があるように、狩野家と大変ゆかり深い寺院であったことがわかります。

前回の葛飾北斎は、下町墨田が生んだ浮世絵師として、いかにも庶民の芸術家でありました。一方、元信は將軍とか貴族といった支配者のための絵師でした。その作品は、確かにすばらしいものではありませんでしたが、当時の庶民にとっては手にすることは勿論、見ることもすらかなわぬものでした。こうした対照的な二人の画家に墨田がゆかりをもつことにある感慨をもたずにはいられません。

加藤千蔭

千蔭は、伊勢松坂の人、枝直の三男で、享保二十年（一七三五）江戸に生まれました。枝直は江戸の与力であると共に著名な歌人でした。また、当時江戸に出てきた賀茂真淵の保証人でもあり、門弟でもありました。しかも、わが子千蔭を十才で真淵の許に入門させています。真淵と言え、国学の四大家の一人といわれる著名な学者で、本居宣長等多くの優秀な門人を育てています。万葉調のすぐれた歌人で、国学を学問的に深めるとともに、その普及に大きな功績がありました。

こうした父と師を得た彼が、国学に歌道に精進し、すばらしい業績を挙げたことはいまでもありません。さて、千蔭の遠い祖先は橋たけな諸兄のちのちと言われ、氏は加藤ですが、姓は橋です。幼名は佐芳すけよし、字は徳与磨とくよまろ、通称は常太郎、後に亡父の通称をついで又左衛門を名乗り、萩園はぎの・朮園うけぞのと号しました。朮はおけらのことで、山野に自生する菊科の薬用植物です。

兄二人は夭折し、父は七十二才で退職したため、二

十九才でその跡をつぎ、吟味方助役に、翌年吟味役に進んでいます。

やがて、將軍は家治から家斉に変わって、権臣田沼意次が失脚、松平定信が老中首座につき、やがて寛政の改革となります。この余波を受けた千蔭は、病に託してすでに退職していたのに、在職中勤め方宣しからずというので、二百石の禄を百五十石に減じられた上に、百日の閉門となりました。彼はこの閉門を機に、名著『万葉集略解』三十巻の著述に着手、十余年の歳月を費して完成。これが彼の歌名と共に天下の評判となり、富小路貞直卿から特に所望されて贈呈したところ、礼状と中山大納言の書幅を頂き、これだけでも当時としては大変な栄誉であるのに、公儀の内意で白銀十枚を賜わり、重ねて面目をほどこしました。このことがあって、定信からも後に幾度か招かれましたが応じなかったといえます。

こうして晩年の千蔭は富小路卿の知遇を得、光格天皇の皇弟妙法院一品の宮から歌を召され、宮が江戸に御下りの際、同門の親友村田春海と共に召される光栄に浴しました。これにより、その名声はますます高まり身分の高い人々は勿論、花街の女までが争って入門

するといった有様でした。

彼は、また幼少から書を好み、研鑽をつんで一家を成しました。特に仮名書に長じ、千蔭流と称して広く行われるようになりました。好事家は千蔭の書を陶器に焼き「千蔭焼」織物として「千蔭緞子」と称して愛玩したものでした。なお、向島百花園の茶店の掛行灯「お茶をきこしめ梅干もさむらふそ」は、始め千蔭が書いたと伝えられています。彼も百花園をこよなく愛した文人の一人でした。

千蔭は、建部綾足（註・弘福寺に墓碑あり）に画を



掛行灯（百花園）

学び、蜀山人等とも親しくし、橘八街の狂名で狂歌をつくり、黄表紙に興味をもつなど、江戸ッ子的風格の色濃い人でした。そうしたことが、彼の歌風にも出て、師真淵が熱心に唱道した萬葉調をとらず、新古今・古今調の江戸派を興したことにつながるように思えます。彼は文化五年（一八〇八）七十三才で死歿し、回向院（両国二丁目）に葬られましたが、墓石の「橘千蔭之墓」の字は、生前自ら書いておいて寺僧に与えたものと伝えられています。墓碑は都旧跡に指定されています。

千蔭は隅田川を愛して、随分歌に詠んでいます。例えば、「弥生なかば、人々と共に角田川に花見にまかりて、その川辺なる成林禅尼（墨田二丁目に成林庵という尼寺がある）がもとにて歌をよむに船中花見ということ」と前書して、次の歌を詠んでいます。

さす棹の

しずくも香にやにほふらむ

堤の花の影うつるころ

また、「隅田川の堤の桜さかりなる頃、石浜（荒川区）のかたより見をりて」として、

陽炎の夕日ににはう花の香を

かどはむ春の河風もかな

(註・かどはむさそい来たらん)

春はただ都鳥にも身をかへて

散るとも花の波にかづかむ

(註・かづかむ水をくぐるこゝ)

さらに「隅田川のほとりの庵にて雨ふる日にほとと

ぎすを聞きて」とあって、

遠かたや あしたの雨にうちけぶる

梢すぎ行く山ほととぎす

なお、吾儒神社(立花一丁目)にも、藤の盛りの頃

に詣でて、

藤波の名さへかしこし走水

荒かりし代のむかししのべば

橘 守 部

守部は、天明元年(一七八二)に伊勢国朝明郡小向村(現三重県朝日町)に生まれました。この朝日町役場前には「橘守部翁生誕之地」と刻まれた石碑が建られています。さらに石碑面には「くちせぬ名を国つ学の道のとに残せる大人はこの里ぞ生みし」と前書して、「時じくのかぐのこのみのかぐはしき、たかき名仰がむ八千とせ後」の歌一首が刻まれています。有名な佐々木信綱―三重県出身の文学博士で歌人でもある―氏の書であり、歌なのです。

守部の父、飯田長十郎元親は小向村の大庄屋格を与えられていました。その遠い祖先は、南朝の忠臣北畠親房だと言われ、このことが守部の国学研究を志した動機の一つであったとも伝えられています。また、母の実家も、この地方の名家でした。

彼の幼名は旭敬、通称を元輔、字を庭磨、後に守部といい、池庵と号しました。なお、出生の翌年に夫婦不和のため、母は実家に去り、姉町子は母にしたがいました。

その後、故あって家が滅び、従兄杉浦信英に伴われ大阪へいきます。それが十二才の時、以後大阪におり、その後父の死によって、江戸に下り、芝新銭座に居を定めたのが寛政九年、十七才の時でした。なお、守部が橘姓を名乗ったのは、母方が楠氏なので、楠氏は橘氏を祖とするところから橘姓を称しました。

二十一才の頃には仮名付の四書等を読み、手習等も始めました。四書というのは、儒教の基本となる大学・中庸・論語・孟子を指します。

二十五才、八丁堀に居を移し、宇治大納言物語・今昔集・十訓抄等多くの書を読み、国学に志のあった父の遺志をつぎ、国学の研究を志しました。なお、一方では築地の葛西健蔵（著名な儒者）の許で経書の講義も聴きました。やがてその才を認められて、健蔵から儒者として立つことを勧められるほどでした。

二十九才（文化六年）八月、武州幸手^{さいて}に移住しました。幸手の人、田村清八の女政子と結婚したのはこの頃のように、文化十一年には長男冬照が生まれています。彼の国学研究は幸手に移ってから、いよいよ深められたようですが、彼の国学研究はすべて当時の主流である本居宣長に對抗する意識でつらぬかれておりま



守部墓（長命寺）

す。幸手在住の十数年間には多くの優れた述作を世に問うています。

四十八才（文政十一年）の時、再び江戸にもどり、しばらく深川大島あたりに仮住いし、後、浅草弁天山に居を定めました。

五十一才（天保二年）には、『山彦冊子』を著わして、名声とみにあがりました。

六十八才（嘉永元年）の四月三十日に労症（肺結核）のために病臥、それでも六月三日には箱根に遊び、七月二十三日江戸に帰ってきますが、この時のことを記録した『箱根日記』があります。此の頃、本所法恩寺橋に転居、^{しいがもと}椎本と号しました。

翌年六十九才で歿し、向島の長命寺に葬られました。なお、昭和三年に正五位を追贈されています。

墓碑正面に「橋守部之墓」と刻み、裏面に「嘉永二年五月二十四日」と歿年があり、さらに左側面にて「依遺言門人中村祐良謹書」とあります。中村祐良は、蔵前の礼差商であったということです。

守部の生家は浄土真宗なのに、天台宗の長命寺に墓所があるのは、守部と長命寺の住職と歌道の交が深かったからだと言われ、以来橋家は長命寺を菩提寺とし

ています。なお、守部の墓は東京都旧跡に指定されています。

守部は、伴信友・平田篤胤・香川景樹と共に天保の四大家とまで称された国学者です。前回の加藤千蔭に続いて、時代は違いますが橋守部と二人の傑出した国学者を御紹介しました。千蔭と守部とは、学問的立場は全く違うわけですが、こうした学者がともに墨田の地に眠ることに私は誇りを感じずにはいられません。

ところで近頃では国学ということばは余り聞きなれないことばですが、短いスペースで国学とは何か説明することは困難ですが、辞書の解説をするとすれば、「国学とは、古事記・日本書紀・万葉集等の主として文献学研究に基づいて、特に儒教・仏教渡来以前におけるわが国固有の生活及び精神を明らかにしようとする学問です。なお、文献学というのは、文献によって古代の文化を歴史的に研究する学問です。」

徳川幕府は、すべての国民を仏教徒とし、学問は儒教特に朱子学を正統とされた江戸時代であったからこそ、国学が興ったと思います。これが尊皇思想へと発展、やがて明治維新への引金となったのでしょうか。

榎本武揚

堤通二丁目の梅若公園に、近頃では珍しい海軍中将の礼服姿の銅像が、威風堂々あたりを庄するようにたっています。これこそ幕末に風雲を巻き起した榎本武揚の像です。戦後軍人の銅像の多くは撤去されましたが、武揚像は、その文化人としての業績が高く評価されて残されました。

武揚は、天保七年（一八三六）に下谷御徒町柳川横町、俗に三味線堀の組屋敷で出生。通称は釜次郎、柳川と号しましたが、柳川がどじょうの柳川鍋に通じるところから、梁川に改めました。父は武蔵国橋場村（現台東区橋場あたり）の郷士でしたが、後に榎本家の株を買って旗本になった人です。天文学者の高橋景保や地理学者で正確な日本地図を造った伊能忠敬に師事しています。武揚は、こうした父の天文学的、数学的な素質と科学的物の考え方や、技術者の精神を受けついだものと考えられ、後年の彼のように化学や機械技術に秀で、探求心の強い武人を生み出したのでしよう。

少年武揚は、頭脳明晰・温和な性格でした。十二才で昌平黉に入学して儒教を修め、一方では江川太郎左衛門の開いた江川塾で、オランダ語・英語を学びました。この塾でジョン万次郎の話の中で、新世界の交通機械としての汽車や汽船による航海術の発達の話に大いに魅せられたようです。

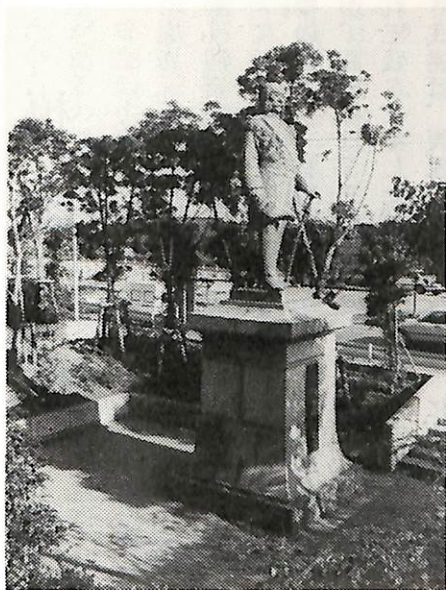
やがて、安政二年（一八五五）長崎に幕府の海軍伝習所が開設されると、彼は第二回生として安政三年に入所を許されました。オランダ軍人にオランダ語で蒸気機関や機械製造に関して学び、特に舎密学（化学）をオランダ医官ボンペに指導を受け、技術者としての素地を深めました。なお、この時彼を指導したオランダ士官カッテンディーケは、その日記の中で、武揚の勝れた品性と絶大な熱心さを大いに評価し、純真、快活な青年だと絶賛しています。

安政六年六月には、江戸の海軍操練所教授に任命されますが、長崎での成績抜群の故といい、この時以来武揚と名乗りました。そして文久二年（一八六二）三月、幕府がオランダに軍艦（開陽丸）を発注し、四月には彼を含めて八名の留学生を派遣しました。彼の地では、海軍兵学校で船舶運用術・砲術・蒸気機関学を

学び、化学を研究しました。また、その間にフランスやイギリス人にも行って先進国の国情を研究しています。一方、フィッセルング博士について、オルトラン（フランスの国際法学者）著『海の国際法規と外交』を研究し、国際感覚を身につけていきました。

慶応三年、オランダから帰朝すると、幕医林洞海の娘たつと結婚、勝海舟に見込まれて、最新鋭艦開陽丸の艦長となります。皮肉なことに開陽丸が函館戦争の時は榎本軍の主力となり、官軍の大きな脅威でした。

私人としての武揚は江戸っ子らしい酒脱さと、豊か



武揚銅像（梅若公園）

な人間性を持ち、妻には優しく、他人の面倒をよくみたといえます。また、女性に大変もてましたが、明治の頭官に多かった妙な女性関係はなかったといえます。

明治維新に際し、江戸城無血開城が決まり、徳川家は七十万石の一領主となって、旧徳川家臣の多くは生活に困窮するようになります。こうした人々の生活がたつように旧領地としての蝦夷地確保が、榎本等のねらいだったといいますが、彼は開陽丸以下軍艦、運送船等八隻を率いて函館へ向かいました。松前城を攻略し、五稜郭によって官軍と大いに戦いましたが、力尽きて明治二年五月降伏し、東京で投獄されました。武揚が自害せずに何故投降したかは諸説あつてにわかに断定できません。いえることは、官軍の参謀黒田清隆が彼の人材を惜み、福澤諭吉等と共に彼の助命に尽力し、明治五年一月六日、武揚は釈放されたことです。同年三月には開拓使四等出仕という当時の県令に相当する高官に任ぜられ、明治七年には、特命全権公使・海軍中将（当時少将まで）に任ぜられ、露都ペトログラードへ樺太問題解決のため派遣されます。当時国際法に通じ、語学に堪能で外交手腕のすぐれた人材として、彼の右に出る者はありません。国力の格段に違っ

強国ロシアを相手に無事使命を果して帰国した彼は、

通信・文部・外務・農商務の各大臣を歴任し、子爵を授けられ、枢密顧問官となっています。然し、薩長閥の明治新政府にあつては、流石の彼も手腕を発揮する場がありませんでした。

晩年は向島に隠棲^{いんせい}、早くに夫人を失った淋しさを、墨堤を散歩したり、自邸で観桜の宴を催してまぎらわしつゝ静かに過し、明治四十一年、その波乱の人生を閉じました。七十三才。駒込吉祥寺に葬られました。

江川太郎左衛門

江川太郎左衛門と聞けば、伊豆^{いず}韭山に大反射炉（安政元年）を築き、鉄製の大砲を鑄造した幕末の先覚者と答えるのが、わたくしの少年時代の人々でした。恐らく今は、はてどういう人物かなと考える人の方が多いのではないでしょうか。ましてや、彼の江戸屋敷が南割下水に沿った津軽侯の屋敷前にあったこと、そして彼が安政二年（一八五五）一月に、ここで五十五才の生涯を閉じたことを知る人はさらに少ないと思います。なお、彼は韭山の本立寺に葬られました。

ところで南割下水というのは、元の青果市場前から大横川方面へ向う大通りの中央を流れていた堀割で、大正大震災後に埋めたてられました。

太郎左衛門は、享和元年（一八〇一）韭山に生まれています。幼児を芳次郎、諱^{いみな}は英龍、通称は太郎左衛門、担庵と号しました。

江川氏は、清和天皇の流れをくむ名家で、伊豆の土豪として世々この地に勢力をはり、太郎左衛門の通称を代々伝えていきます。

担庵は、五才から四書五経等の漢籍を学び始め、七才の秋までに剣・柔・鎗・弓・馬の武芸は勿論、絵画・書・歌・俳諧・詩文の道も修めました。例えば剣は、当時随一といわれた剣客、岡田十松に、絵画は谷文晁、詩文は大窪詩仏といったように一流の人を師としています。これは、担庵の父英毅が雪扇楼等と号して俳諧をよくし、各方面の一流の人物と交わりをもっていたからできたことで、英毅は歌川豊国、朝川善庵（註・向島三丁目の常泉寺に墓所）、大田南畝、杉田玄白等とも交わっています。なお、祖父英征も俳諧をよくし、大島蓼太が江川家を訪れ、

棟札も久しき代々や夏木立

と一句遺しています。

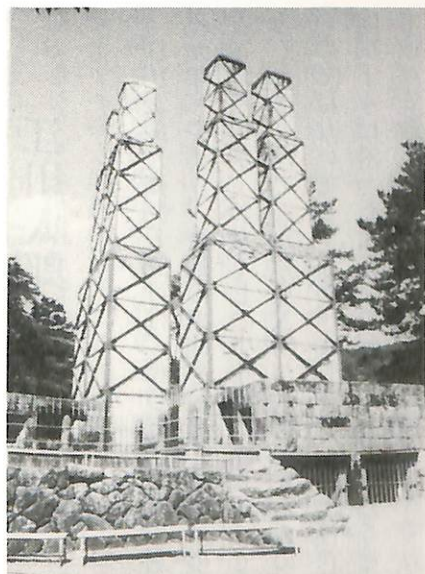
さて、担庵は、兄の病死等のこともあって、二十四才で葦山代官職見習となり、さらに十年後には父死去のため、葦山代官職を継ぎました。

担庵が代官となった頃は、内外ともに多事多難な幕末で、幕府は日本の周辺をうかがう黒船対策に頭を悩まし、国内的には尊皇倒幕運動の弾圧に苦慮する時代でした。こうした時代の動向を鋭くとらえた彼は、天保八年（一八三七）には、伊豆半島海防意見書を幕府

に提出、翌年には目付鳥居耀蔵を正任、担庵を副任として、幕府は海防上重要と考えた浦賀方面の測量を命じました。この時の海防測量図の正確さでは、担庵は鳥居に格段の差をつけ、幕閣に彼の新知識の尋常でないことを印象づけました。

当時、江戸の山手に住む洋学者を中心として、新知識を交換するためにつくられた尚齒会（しょうしかい）という会合があり、担庵もこれに加わっていました。このため測量等も、優れた技術者の助力を得られたわけです。

この尚齒会には、渡辺華山、高野長英、佐藤信淵



葦山の反射炉（葦山町・提供）

（農政学者）等進歩的な考えの人々が集まっていた。

天保十二年、高島秋帆^{しゅうはん}は幕命を受けて徳丸原（板橋区在）で洋式砲術を公開しましたが、幕府はその偉力を認めて秋帆を与力に列して、登用することにしました。担庵は、この秋帆に師事して、その火術のすべてを伝えられました。

さらに担庵は「江川塾」を江戸に開きましたが、佐久間象山等幕末の逸材が続々と入門します。あの榎本武揚もここで学んでいます。

こうして担庵は一代官というよりも、幕末の有能かつ、進歩的な幕吏として重用されます。例えば、弘化三年（一八四六）には幕命により、伊豆諸島を巡視して海防策をねりました。さらに嘉永六年（一八五三）八月には、品川台場の築造に着手、砲台を築いて海防を厳しくしました。

ここで担庵の人柄の一端を御紹介しましょう。彼は幕府直轄代官という要職にありながら、その生活は極めて質素でした。着るものは礼服以外は木綿で、食事は新香と味噌、好きな酒も日に二合までとしました。さらに障子も客間以外は古紙を使用、畳もできる限り

使ってかえません。しかし、子弟の教育費、舶来の科学研究費は少しも惜みませんでした。また、支配地を巡視する時も、領民に余分な負担をかけまいと、一汁一菜を堅く守りました。一方、孝子節婦を見出して盛んに表彰しました。

また、担庵には、こんな一面もありました。それは下田港に侵入して来た英測量艦マリーナ号艦長マクソン中佐との談判にあたっては、越後屋（日本橋三越の前身）唯一着という高価な蜀^{しよつこうのしき}紅錦の野袴を買って、同様の陣羽織と共に着用、黄金造^{こがねづくり}の太刀^{たち}を佩^はいて、威風堂々応対しました。幕府代官としての面目を保ち、外国人の侮りを防ごうという心意気が偲ばれます。

安積 良 齋

本所区番場町、今の東駒形一丁目に日蓮宗の妙源寺という寺院がありました。嘉元二年（一三〇四）に中老天目上人が開創されたと伝えられています。この寺には、幕末の大儒として知られる安積良齋の墓があります。大正十三年二月には、都の旧跡として指定されています。

この妙源寺は、大正大震災で焼失し、大正十五年に葛飾堀切三丁目二十五番に移転しました。立派な木造の本堂と鐘楼、鉄筋コンクリート造の庫裡、そして整然とした墓域があります。

良齋は、寛政三年（一七九一）三月、福島県の二本松領の郡山に安藤親重の三男として生まれました。通称は祐助、諱は重信、字は思順といひます。父親重は郡山の鎮守八幡宮の神官で、後に安積国造神社の神官も兼ねました。

やがて、父の職務の関係で二本松に住むようになり、ました。二本松藩は小藩ながら幕府の寛政改革後は藩学の制度を拡張して、学問を奨めたので読書人も多か

ったようで、郡山よりずっと気力にみちた町でした。良齋が幼い時から読書好きだったのは、こうした環境の力もあったと思われますが、次のような逸話もあるほど生まれつき読書好きだったと思われます。

幼小の時、母が婚礼等で他出する際、同行を求めて泣きわめき、錢をくれれば泣き止み、その錢をためて書物を買ったといひます。

さて、喜多村香城著『五月草紙』には、次のように書かれています。

「安積祐助、良齋と号し、見山楼とも号す。予が儒学の師なり。

（中略）

年十七の時養子先伉儷の不遇より志を励まし、僻境にては逆も学問は出来ずと思ひ立ち、家を逃れて江戸に出たり。（註・伉儷の不遇とは、夫婦不和のこと。

良齋は三男ですから、隣村、横塚村の名主である今泉氏の養子となりました。横塚村は、戸数一〇〇戸に満たぬ僻村でした。読書好きで、野良に出ても書物に夢中、しかも色黒で、不器量の彼は妻に嫌われた。）

千住にて一人の僧と道連れになり、色々話などする序に僧が問うには

『一体、少年が一人にて遙々江戸へ来るは何故なりや』と。

良齋答へて

『予は学問修業に志したるが、江戸には柴野栗山という大儒先生ありと聞きたれば、縁由（ゆかり）もなけれど尋ね参り、仲間などに住み込み、水汲み、飯炊きをなすとも、出精して見度思い参りしなり。尤も江戸には親類も知音（知りあい）も更になし』と云いしかば、彼僧深く憫み、

『予は本所番場なる妙源寺という法華宗の住職なる



良齋墓（妙源寺）

が、今日法用にて千住在まで往たる戻りなり。…略…』

この僧は日明上人と言い、後に日蓮宗の大本山身延山久遠寺の住職に栄進された方ですが、良齋と道中話しながら、少年が並々でない人物であることと、その学問に対する熱意と学殖とにうたれて、しばらく妙源に泊まることを許しました。当時、宗派に無縁のものを止宿させることは法度になっていました。勿論、寺にある間に唐本の三国志等で学力を試してみましたが、住職を感嘆させるのに十分な成績でした。彼が望んでいた柴野栗山は当時重病のために、栗山に劣らぬ大儒として知られた佐藤一齋に紹介して入門できるように骨を折りました。

このようにして、ようやく念願になった良齋は、師の家のために骨身を惜まず働くと共に、学問に全精力を打込みました。

やがて、林大学頭述齋―幕府儒学の最高位にある―に入門することになり、さらに学識をつむこと数年、幕府の昌平黉教授となります。それは嘉永三年（一八五〇）、良齋六十才の時でした。なお、それより以前（天保十四年（一八四三））には、招かれて故郷二本松藩の藩黉敬学館の教授となり、百五十石を与えられ

歌澤 笹 丸

ました。しかし、彼が学者として活動するには、二本松は狭すぎたのでしょうか、故郷に在ること一年半ほどで再び江戸へもどりました。

前にもふれましたが、艮齋は容姿あがらず、しかも身の廻りを飾ることをせず、学問の道一筋でした。そして、人の善い点を取り上げ、悪い点はいわず、誰にも誠実に対しました。なお、この時代は、幕末で尊皇・佐幕、開港・攘夷（じょうい）と思想的対立が激しく、多くの学者がそれにかかわったのですが、艮齋はこれにかかわることなく、儒者としての立場を守りました。しかし、門人には多くの俊秀を出しましたが、栗本鋤雲もその一人です。彼は喜多村香城の弟であり、初代の本所区議会議長に推された本区とゆかり深い人物です。

艮齋は、萬延元年（一八六〇）十一月、七十才で病歿しました。

歌澤笹丸というのは芸名で、その実は本所割下水に住む笹本彦太郎という五百石取の旗本です。彼は寛政十年（一七九八）の生まれです。この頃になると、打続く太平の世に旗本も武芸を発揮する余地もなく、従って功名手柄をたて出世する望みもありません。そこで文芸とか音曲面に生甲斐を求める者が少なくありませんでした。笹丸もそうした一人でした。ちょうどこの頃は端唄が流行して、何々連とか何々誰といった同好者の団体が多くできました。その中に旗本の隠居という気楽な身分の笹丸を中心とする梅の湯連があり、その連中によって工夫された新しい端唄を歌澤と呼ぶようになりました。

梅の湯連の主なメンバーに畳屋の平田虎右衛門、御家人の柴田金吉、魚屋の定吉、火消しの蛇の茂兵衛、稲荷の滝等がいました。安政四年（一八五七）六月、笹丸は仲間の代表者に推され、歌澤節の家元となり、嵯峨御所から大和（やまと）大掾歌澤絃三源忠金の名を受領しま

した。これが歌澤節の起原とされています。

近頃でも小唄・端唄はラジオ等で、たまに聞くこと
もありますが、歌澤は聞くことができません。邦楽の
歌ものの中では最も技巧的な歌い方をし、渋い錆のあ
る芸風なので、今の時勢にはちょっと受け入れられな
いのかも知れません。その音楽的特長は、次の様に言
われています。

- ①小唄の二倍はかかるといふスローテンポ。
- ②低音を巧みに多く使い、高音は力をぬいて、やわ
らかく細かくうたう。

- ③低音を生かすために三味線は中棹を使い、低いふ
くらみのある音色を出す。

- ④唄が主役で、三味線は伴奏として唄の間に入れる。
さて笹丸の梅の湯連にいた平田虎右衛門は、笹丸が
大和太鼓受領と同時に歌澤寅右衛門を名乗り、続いて
笹丸から家元を譲り受けました。

この虎右衛門は、江戸日本橋生まれの、端唄が大好
きな畳職人でしたが、そのあまりの美声が評判となっ
て門弟をとるようになりました。同じく端唄好きの旗
本笹丸といっしか親しくなり梅の湯連に加わるようにな
りました。やがて、笹丸から家元を譲り受け、安政

四年七月に嵯峨御所から歌澤能登の名を受領しました。
同年九月に笹丸は病歿し、押上の最教寺に葬られまし
た。なお、最教寺は大正地震で全焼し、大正十四年
杉並区へ、さらに昭和四十年八王寺へ移転しています。
なお、寅右衛門は明治八年に病歿し、吾妻橋二丁目の
妙縁寺に葬られました。

この寅右衛門と同じく梅の湯連に柴田金吉がいまし
た。彼は江戸高砂町に住む御家人弥三郎の三男で、大
の音曲好きでした。寅右衛門が美声で唄専門なのに
対して、彼は三味線も上手でした。笹丸歿後、文久二



笹丸顕彰碑（三囲神社）

年（一八六二）に寅右衛門等の仲間から独立して、哥・澤土佐の名を受領して、哥・澤芝金と号しました。

歌澤は、ここに寅右衛門の寅派、芝金の芝派の二派に別れて発展することになりました。両派の違いを要約すると、

①寅派のうたい方はおっとりとして、いわば町人風であり、芝派は強い気迫が感じられ、速度も比較的速く、いわば武家風とでもいえましょう。三味線も芝派はひきしまった音を出します。

②両派共通の歌詞にも、僅かながら違いがあります。

③寅派だけが演奏する曲もあれば、芝派だけが演奏する曲もあります。

両派それぞれに特長があるものの、もともと歌澤は渋い芸風で、技巧的にも難しい点があるので、はいりやすく、唄いやすい小唄に圧倒される傾向がありました。

さて、寅派では、初世を笹丸として、寅右衛門を二世として家元をついでいましたが、芝派は芝金を初世とし、しかも歌澤の歌を哥の字にかえています。

初世芝金は、河竹黙阿弥や仮名垣魯文等文化人との交際が広く、黙阿弥との関係で、自ら歌舞伎の音楽に

出演し、劇場進出の道を開き、歌澤の普及宣伝に役立てました。明治七年四十七才で歿し、陽運院（太平一丁目）に葬られました。

なお、向島の三囲神社には二世歌澤寅右衛門が建てた石碑があり「笹磨翁が歌澤一派をひらかれしより、此道月に日にますますさかむなるよろこばしさに『露の笹まろめて月のひかり哉』二世寅右衛門」と刻まれ、裏面に「昭和十九年十月 此の句碑を墨堤木母寺より三囲神社境内へ移す 五世歌澤寅右衛門 歌澤社中一同」とあります。

筆者のことば

『墨田区ゆかりの作家』に引き続き『墨田区ゆかりの文化人』を「社会教育だより すみだ」に連載すること二十回。まだまだ多くの人々がいますが、このあたりで一応まとめることにしました。表題を『すみだゆかりの人々』と改めましたのは、文化人ということばが、必ずしも内容にふさわしくなかったからです。

今回も、多少の補筆、訂正を加えて、より人物像を鮮明にすることに努めました。例によって、多くの研究者、評論家、作家の方々の御高説を参考にさせていただきましたことを、紙上を拝借して厚く御礼申し上げます。

なお、私事ながら墨田区教育委員会社会教育課に非常勤として十年間御世話になり、こうした仕事をさせていただく中に、墨田区が故郷のように思われてきました。今後、墨田の歴史・文化の研究を深めていきたいと考えております。いっそうの御指導、御叱声をお願い申し上げます。

社会教育課

元文化財保護指導員 水谷 五郎



すみだゆかりの人々

昭和六十年三月三十日発行

編集発行 墨田区教育委員会社会教育課

墨田区横網一ノ六ノ一

電話(六二六)三二五一

印刷所 合同印刷株式会社

墨田区業平二ノ九ノ十三

電話(六二四)六一一一

91,000-

あなたの返す日

あなたは日付表の一番あとに書いてある日までにお返してください。よみきれない時は申出てください。1週間延期できます。

[illegible]

休館日 毎週月曜日・毎月十四日・国民の祝祭日

東京都立青梅図書館
青梅市青梅268 TEL. (0428) 22-2975

墨田区立あすま図書館
(03)3612-6048



312756562

